

桃葉御集第一句「あやにくに」に作る、

あやなくに待つ夜は鳴かで時鳥きゝもさだめぬ夢をとふらむ
郭公驚夢

まがひつる夢より後の一聲はさらにうれしきほとゝぎすかな
寢覺郭公

桃葉御集第五句「なぐさめてゆく」に作る、

ひとりぬるさよの寢覺を時鳥そらにしるとやなぐさめて鳴く
わがためは寢覺をりよき郭公たがまくらをかよきて鳴くらむ
早苗

いつしかとみどりもそひて若苗におもかげなびく水の夕かぜ
植ゑ渡す田面やひろき今日いくかとれどつきせぬ民の早苗は
ところせき緑になびくわか苗はうゑていくかの田面なるらむ
おりたちてとるとも盡きじ小山田の苗代がきにあまる早苗は

桃葉御集第五句「早苗とるなり」に作る、

賤の女が袖も裳裾もうきにのみぬれておりたち早苗とるころ
採早苗

桃葉御集第五句「猶のころらむ」に作る、

幾町の田面をひろみ今日もまたとらぬ早苗やなほのころらし
早苗多

桃葉御集第五句「民のさなへに」に作る、

今日もまた早苗とるなり足引のこなたかなたに田子の聲して
今日幾日おりたつ田子ぞ筑波根の陰よりしげき早苗とるとて
いく千町田面にきほふ時もきぬとる手かずそふ民のさなへは
うゑわたす早苗いく町はるゝと山もとかけてつゞく田面は
雨中早苗

さみだれは晴間をいつと白鳥の鳥羽田の早苗今日もとるらし
薄暮早苗

露見えてなびく早苗のすゑばより田面のくれは秋かぜぞ吹く

澤邊早苗

小田ちかき淀の澤水せき入れてとるやさなへに里ぞにぎはふ

山田早苗

うゑわたす早苗のすゑ葉露見えてくる、山田のあかぬ涼しさ

民戸早苗

今日もまた早苗とるとや賤の女がさそひさそはれ出づる家々

端午

咲きそへて哀をながき絲すぢにかくる五月の今日のことぶき

端午興

いやしきもよきもわかずやあやめ草玉にぬく日のそでの薫は

桃葉御集第二句「命をながき」に作る、

菖蒲

をり過ぐるかをりはいはじあやめ草しげる汀の色ぞすゞしき
かくる根もながき五月の玉の緒の例を今日は引くあやめぐさ
今日はまたからぬあやめの追風によるさゞなみもかをる池水
袖ごとこのこらば誰かとがむべきあやめしく夜のあすの移香
千とせへば千たびあやめの枕せむさつきの夜床一夜なれども

曳菖蒲

あやめ草けさひく賤が袖の上にかをれる露もまづやかくらむ

池菖蒲

今日見れば池水ひろくかりあげてこやの軒端も菖蒲をぞふく
刈りふくももとの汀にかげや見む池にのぞめる軒のあやめは

桃葉御集第五句「引くあやめかな」に作る、

桃葉御集第四句「かをれる露を」に作る、

桃葉御集第四句「こやの軒端に」に作る、

それならぬ緑かきわけ池水のみくさにまじるあやめをぞ引く

池朝菖蒲

かりふかば池の菖蒲の今朝の露ひるまも待たで軒端にや見む

江菖蒲

今日まちておりたつ賤や濁江のうきをもしらで菖蒲ひくらむ

沼菖蒲

それとなき水草がくれもかくれぬの深き匂にあやめわかれて

簷菖蒲

今日ごとの契はかれずあやめ草あやしき軒のつまと見れども

閨菖蒲

あやめしくこよひはかはる袖の香の橘ならぬねやもめづらし

橘

小簾のうちにくゆるけぶりも同じ名の花橘のかをり添ふらし
もゝしきに残るを思ふたちばなや名におふ袖の香いろいに匂ふらむ
にほへなほ手向もみとせ橘のみちてうれしきさつき待ちえて

盧橘

をりにあふみなみの風もこの殿の花たちばなにいと薫りて
もゝしきの昔の道にたちばなのかげふむ袖もかゝれとぞ思ふ
あはれたが昔しのぶの軒端とか露もこぼれてにほふたちばな
いつの世をしのぶとなしの身にしむやなべてむかしに匂ふ橘
かをる香に残る昔はありながらとへばこたへぬ風のたちばな

盧橘薫

桃葉御集第三句「たきすさび」に作る、

おなじ名のそらだきものもたきすさぶ花橘の香にめづるころ
雨中盧橘

桃葉御集第一句「忘れずば」に作る、

とはれずば昔をおきてしのべとやかをる雨夜の軒のたちばな
いつとなき句もさらにうちしめる雨のゆふべの軒のたちばな
夕盧橘

身にしむはいつのさつきのゆふべをか花橘のはじめなりけむ
夜橘

桃葉御集第二句「あやめもあさき」に作る、
桃葉御集第一第二句「見るふみの残る昔も」に作る、

一夜しくあやめはあさき移香のたまくらなれて匂ふたちばな
見るつきの残すむかしもことそへてまどふかき夜にかをる橘
夜盧橘
見る夢もしのぶ昔にかよへとやよるはすがらに匂ふたちばな

桃葉御集第三句「ゆくへと」は「に作る、

身にしめて聞へも入らじしづかなる雨夜の軒に匂ふたちばな
香に匂ふをりしもあかず橘の見ぬよをしのぶよるのまなびは
をりしもあれ見し夜の夢のゆくへはと思ふまくらにかをる橘
いにしへを思寝しるきゆめや見む花たちばなのかをる夜床は
簷盧橘

今日はまたふくや菖蒲の夕風にかをりそへたる軒のたちばな
閑庭橘

しのべとや誰かはひとりたちばなの陰ふむ庭にのこす袖の香
砌橘

誰とひて花ぞ昔のとばかりにあはれを添へむやどのたちばな
盧橘散風

桃葉御集第一句「しのべと」に作る、

風はなほ心もなしなときは木の名にたちばなもあだに誘ひて

盧橘驚夢

桃葉御集第一句「いにしへも」作る。

いにしへを見しやあらぬと橘のみはもとの身にかへる夢かな

對橘問昔

袖ふれしはじめをとへばいにしへのとこよをかけてにほふ橘
しのべとて誰が袖ふれし橘のかくのみ世々をにほひきぬらむ
ものいはぬ花橘にいにしへをとへばこぼれてつゆぞこたふる

岡樗

あらましき岡への松の夕風をうらむらさきにあふち散るかな

杜樗

あふち散るゆふべ露けき杜のかげ暑き日す々む折もしのばむ

桃葉御集下句「うらむらさきのあふち散るかげ」に作る。

春も見る花はなかりし山がつのそともの杜にあふち咲くころ

里樗

あふち咲く垣根ぞしるべとひよらむゆかりもしらぬ里の遠方

樗誰家

たが宿としらでもとはむたづぬべきゆかりの色に樗さくかげ
色はそのゆかりながらに誰とかは若むらさきのあふち咲く宿

戶外樗

柴の戸は軒端のあふち咲きぬとて色のゆかりにとふ人もなし

霖

今日いくか柚木ひきすて斧の柄もくたすばかりの五月雨の比

梅雨

桃葉御集第二句「垣根にしるべ」に作る。

民の戸にまちてよるこぶ雨ならば晴れず五月の日數をもふれ
かきくらす道のちまたはふりはへて行く人もなき五月雨の比
木のもとに色ある梅をひろひてや雨はれぬ日の數にとらまし

梅雨久

かぎりありと見えし雲間をまたとちて後も幾日の五月雨の空
さみだれちかみ

五月雨

五月雨は今いくかありてこの比の空めづらしき雲間をも見む
めづらしく晴れぬる山の麓よりまた立ちのぼるさみだれの雲
月も日もいつかはかげを三室山ふるほどひさしさみだれの空

桃葉御集第二
句「軒のしづ
くも」に作る、

桃葉御集第五
句「このごろ
の雲」に作る、

さみだれは軒のしづくを吹く風にほさでかけそふ露の玉だれ
日かずへて待ち出づる空の雲間さへ猶たのまれぬ五月雨の比
風すさぶ軒のしづくのさみだれは猶をやみなきこのごろの空
五月雨はかさなる雲のいづくともわかぬ月日の影ぞまたる、
さみだれはよもの大空くもとちて千里におなじ晴間まつころ
さみだれは緑したゝる木がくれにありかも梅の見えて色づく
この比もあまり日をへて幾日ともかぞへずよまぬ五月雨の空
つれづれとくらさばいかに暮しわびむ五月の雨の長き日の空
をやみなき軒のしのぶの五月雨はいつ晴れぬとも限しられず
五月雨は水もやわきていづみ河かはおとたかき杜の木がくれ
ふらぬ日も多き今年の五月雨はよにめづらしき露ぞ見せける

桃葉御集第一
句「この比は」
に作る、

五月雨晴

わづかなる雲間の影も今日いくか待たれて晴る、五月雨の空
六月のてる日をちかみいつかはと見し五月雨の空もはれぬる

五月雨雲

さみだれの雨の八重雲幾重ともかぎり知られぬ日数をぞふる

夜五月雨

名のみしてもる玉水のみじか夜も明けやらぬ比の五月雨の宿
よなくの月をば雲のいづこともわかでぞふかす五月雨の宿

山五月雨

をやむまもなほ峰はれぬ五月山またあめもよの雲のほるなり

杜五月雨

桃葉御集第五
句一さみだれ
の比に作る、

五月雨の晴間にゆけどをやみなき^く雫のもりは名こそおとらね

瀧五月雨

さみだれは思ひもかけぬ岩根までそへて落ちくる山の瀧つ瀨

江五月雨

山人のをのゝふる江の捨小舟こゝにもくたすさみだれのころ
みをつくしたてるも見えず難波江の底にや朽ちむ五月雨の比

河五月雨

淵は瀨にいつか變らむあすか川いくかもおなじ五月雨のころ

湖五月雨

さみだれはみづうみひろく猶見せてさ々波こゆる志賀の大海

鷄

桃葉御集第二
句「くひなも
あやな」第五
句「さ」でれ
ぬ夜は「に作
る、

驚かすくひなもあれや月をこそ松のとほそはさゝでねぬ夜を

水鶏

名残あれや叩く水鶏の聲のうちに明けなむとする櫺の戸の月
天の戸のあくるはをしき月の夜をたゝく水鶏に任せてや見む
窓近くたゝく水鶏はうたゝねの月やふけぬとおどろかすらむ
夜もすがら叩くにあけぬ櫺の戸を誰にかこちて水鶏なくらむ
こたへせで人はぬる夜の櫺の戸をたゝくや何の水鶏とぞ聞く

夕水鶏

暮れあへぬかげにたぐひて夕月夜ほのかにもあるか水鶏なく聲

泊水鶏

こよひ聞くくひなぞ苦の窓ちかくたゝく板戸も波のうきねに

桃葉御集第一
句「聲のうち
は」に作る、

何をたゝく水鶏なるらむ閨の戸もさゝぬ小舟の夜のとまりに

水鶏驚夢

聲のうちにさめぬ枕の聲ならばくひな鳴く夜の月や見ざらむ

夏月

すゞしさはしばしがほどの端居にて袖におぼゆる月の霜かな
てりそはむ光をそらにいそぐかとまだき秋なる月のすゞしさ
しろたへの袖にかさねて夏しらぬ霜をかたしく月のしたぶし
たとへけるあふぎもえやはまがふべき夏をわするゝ月の下風
暮れがたき日影にわびしあつさをも月にわするゝ夏の夜の空
ほどもなく更けてやしろき夏しらぬ月の霜夜のかさゝぎの橋
夏しらぬ月のかつらのかげすゞしこのよの外の風もおりきて

桃葉御集第五
句「風しおち
きて」に作る、

桃葉御集下句
「夏なき月の影をしぞ思ふ」に作る、

明けやすき名残をかこつ夜なくは夏なき月に秋をしぞ思ふ
霜おくと見るかげふけて夏ぞなき聞へも入らぬ月のはしるに

夏月易明

桃葉御集第三句「端居にて」に作る、

すゞしさもたゞ時のまの端居していくたび明けぬ夏の夜の月

雨後夏月

桃葉御集第四句「月もすゞしき」に作る、

雨はるゝなごりの風にちるつゆも月にすゞしき楢のしたかげ

外山夏月

明け易き月こそあかね外山なる眞拆のかづらくるゝ夜ごとに

夏野月

澤に鳴くかはづも月のところからあかね夏野のかへるさの道
かげやどす露はまれなる月の夜も夏はほかゆく野邊の涼しさ

海夏月

夏がりの難波の蘆邊ふしのまもみじかき夜をや月にふかさむ

浦夏月

桃葉御集第一第二句「夏しらすみるめにあかず」に作る、

浦とほくよせてすゞしき波のまも難波のあしのみじかよの月
夏しらぬみるめにあかで明けやすきうらみを月にかくる浦波
来ぬ秋のみるめをよする浪の間に吹飯の月のあたらみじか夜
すゞしさを招くと見れば玉くしげ二見の月のあけやすきかげ
風そよぐ月のあしべにこぬ秋のこゑまでそふる和歌のうら鶴

湖上夏月

ところからわたりをすべく諏訪の海に夏なき月の氷をぞしく

磯夏月

桃葉御集第三句「諏訪の海」に作る、

桃葉御集第一
句「見る程も」
第五句「月に
なる夜も」に
作る、

見る程ぞあやなすくなき暑き日の入りぬる磯邊月になるとも

水郷夏月

飛鳥河かはよど知らぬかげなれや流れてはやき月のみじか夜

山家夏月

山かぜも秋ある松のしたいほにみじか夜しらで見る月もがな

竹亭夏月

軒ちかき竹の葉わけのかげ見えてこぬ秋かぜを月にともなふ

竹間夏月

もるかかげも葉がくれおほし今年生の竹の小枝のみじか夜の月

夏月透竹

夏しらぬ風も吹きそひもるかかげに竹のはやしの月ぞすゞしき

桃葉御集第一
句「山風に秋
なる松の」に
作る、

桃葉御集第一
句「見るかげ
も」に作る、

瞿麥

おもからぬ露にえならずうちしをれねたる夕のとなつの花
咲きまじる花はあまたの種とりて植ゑしに似たるかきね撫子

とこなつの花

散らでその名にしおふとも見る人の秋にはあはじ床夏のはな

朝瞿麥

今朝の露おきゐるまゝのとなつの折る一花の色や似ざらむ

籬瞿麥

花見むと種やはまきし山がつのせまき垣ほに咲けるなでしこ

夏草

夏ふかくしげりにけりな草の原わけこむ人のみちもなきまで

桃葉御集題
「朝折瞿麥」第
一第二句「お
きぬるまゝの
となつに」
に作る、

夏草滋

桃葉御集第五
句「庭の草葉
に」に作る、

秋まちて咲く花あらばいかゞ見むしげるをいとふ庭の草葉も
刈らずともしばしのかげを夏草のあらそひ立ちて茂る庭かな
また見むも草を夏野のこととほくしげるみどりにうづむ通路

夏草漸深

桃葉御集第一
第二句「また
見むと草を冬
野の」に作る、

今いくかあらば夏野の草の庵それともわかずしげりはてまし

月前夏草

なつぐさのしげみが原をたづねてや秋まつ露に月やどるらむ

野夏草

秋ちかき野邊は牡鹿のむねわけもあと見えぬまでしげる夏草

野夕夏草

夕露の玉おきながらすゞしさはまねく袖なき野邊のをすゞき

杜夏草

花に見む秋かぜちかし夏たけておいその杜のかげのしたぐさ

水邊夏草

露わくる夏野の草のうもれ水くまぬたもともぬるゝすゞしさ

澤夏草

春の水のみてる澤邊に見しよりもみどりはふかくしげる夏草

庭夏草

秋まちて花見むほどの種もあらじ植ゑぬにしげる庭の草葉は

野草秋近

ほに出でぬすゝきも秋と見るばかり露深くなる野邊の一むら

桃葉御集第五
句「庭の夏草」
に作る、

鶉河川イ

かゞり火のひかりやそひて山陰の月を鶉舟におもひけつらむ
うかひ人おもへ篝のかげばかりもえてしづまむ波のうきせを
うかひ舟さすかげうすき夕月の河瀬さやかにてらすかゞり火

鶉河篝

いつしかとほのめき出づる篝火や暮を待ちける鶉舟なるらむ
うかひぶね月は入江の蘆間よりこれも涼しきかゞり火のかげ

瀬鶉川河イ

かつら人鶉繩とる手のひまやなきさばしる鮎ふかいもはやき川瀬に

鶉舟多

さよふくる瀬々に鶉舟のかず見えて河邊すゞしき篝火のかげ

桃葉御集第五句「波のうきせも」に作る、桃葉御集第四句「波瀬さやかに」に作る、桃葉御集題「鶉舟篝」に作る、

遠近鶉舟

いざをはぬ遠里人のうかひ火もこの河づらに見えてうかべる

照射

ぬるゝ身はいとはぬ山の雫にもしめる照射をいかにとか見る
宮城野に秋まつ鹿のこゝろをも思ひあへずやともしさすらし

照射欲明

猶のこるかげもあやなしよる鹿を待つ夜あけゆく峰の照射は

深山照射

山水のこがくれはてぬ思ひをばともしに鹿のよるや見すらむ

嶺照射

身をすつるおのが思もしかばかりもえてやたぐふ峰の照射に

桃葉御集第三句「よる鹿の」に作る、

桃葉御集第一第二句「いざなはれ遠近人の」に作る、桃葉御集第五句「いかにとか見む」に作る、

狩人のともす火串を峰に生ふるまつともしらで鹿やよるらむ
くもる夜を忘れてぞ見る峰高き木の間の星にまがふともしは

原照射

眞萩さき鹿鳴く秋もとほからずみやぎが原にともしさすらむ

蚊遣火

よそにたく煙をいとふ軒端にもたえずや立つるしづが蚊遣火
たきす^{まど}さ^{ふい}ぶ煙や閨にうすからしふすかとするばすだく蚊の聲
たきそふる思もさぞなところせき宿にふすぶるしづが蚊遣は
賤の男がぬるまをいつと夏の夜のみじかき軒に立つる蚊遣火
あつきをもしばしたゆめてかやり火の煙ふきやれ閨のさよ風
暑き夜をいかにねむとかいぶせさにかへてふすぶる賤が蚊遣火

桃葉御集第三
句「峰高み」第
五句「まよふ
ともしは」に
作る、

桃葉御集第三
句「とほから
め」に作る、

桃葉御集第一
第二句「よは
にたく煙はい
とふ」に作る、

桃葉御集第五
句「しづが蚊
遣火」に作る、

所せきあつさながらや賤が屋のねられぬまゝに立つる蚊遣火
いぶせさもえこそかこたね夕煙われとふすぶる宿のかやり火
うらぶれて賤がまどろむ程ばかりふせやの蚊遣たきすさぶ比

浦蚊遣火

藻屑火のけぶりをおのが蚊遣とや夏はふすぶる須磨のあま

閑居蚊遣火

徒然のすさびにもあらぬ蚊遣火に猶いぶせさをわぶる宿かな
さしも世の事をはぶけるすまひにもたへぬ夕や蚊遣たくらし

遠村蚊遣火

山もとの蚊遣のけぶりよそにてもしたやすからぬ思とぞしる

隣蚊遣火

桃葉御集第五
句「思をぞし
る」に作る、

夕けぶり立てぬ宿までいぶせきやちかどなりなる賤が蚊遣火
夕煙立つるそなたの軒端よりまづなびきゝてすだく蚊のこゑ
よるはほたるの

たきつなみよるは螢のひかりをも亂るゝ玉と見てやひろはむ
深夜螢

ともし火もきえて夜ぶかき窓のうちにひとり螢の光さやけき

澗底螢火

谷川のせゝの水音とめ行くやともにながるゝほたるなるらむ

水邊螢

くるゝ夜は瀬々のほたるのおのれのみ岩うつ波の玉と亂れて

橋螢

ゆかでたゞひろひもすべくかずくの螢ながるゝ水のうき橋

野螢

暮ふかくもすそもぬれてわくる野に露やまがふと螢とぶかげ

湖螢

さゝ波のよるの螢はあしやかたあまのたく火の鴉のうみづら

浦螢

沖にたくいさりもおなじ浦風のあしまのほたる影ぞかずそふ

江螢

よひのまの月は入江のあしがくれ螢やおのがひかり見すらむ

澤螢

澤に見しよをもへなくに夏刈のあしべのほたる稀になりゆく

里螢

暮れてゆく里のしるべの螢かな清水ながるゝかきねつゞきに

田家螢

ゆくほたる來ぬ秋風はつげずとも鴈がねまたむ小田の庵かな

窓螢

ともし火にあらぬ螢もわびて住む窓の日影はつぐみかりかな

螢過窓

窓ちかき竹の葉わけの夕風に見えみ見えずみ行くほたるかな

叢螢

くるゝ夜を待ちけむ草のしげみよりまづ影見えてとぶ螢かな

螢似玉

桃葉御集第二句「來ぬ秋風に」に作る、

桃葉御集第二句「袖の外なる」に作る、
桃葉御集第四句「螢もいはじ」に作る、

よそこにもや袖の中なる玉と見む包むにあまるよるのほたるは
それと見てひろふにきえぬ玉ざゝの螢もいはゞ同じはかなさ

螢火透簾

みだれとぶ軒の螢や心ありて小簾のとくらき夜をてらすらむ

晩夏螢

秋ちかきまがきの草の露ながら下葉のかげに散るほたるかな

蓮

蓮葉のよしや濁りにしまざらばうき世のうきも知らむ物かは

荷露

見るがうちもすゞしく露ぞまるびあふさゞ波こゆる池の蓮葉

池蓮

桃葉御集題「蓮露」に作る、

おばしまによる袖すぎて吹く風も遠くやかをる池のはちす葉
夕顔

桃葉御集第一句「咲けばとて」に作る、

とひよりて見ればあやしき垣根さへよそめゆかしき花の夕顔
草の戸の露にひかりをあらそひてくるればしろき夕がほの花
たそがれの露のひかりも見る人はあらじかきねに咲ける夕顔
咲けばとく暮るゝ垣根の夕顔は花のあるじも見るほどやなき
疎屋夕顔

桃葉御集第四句「名ぞ人めける」に作る、

かすならぬ垣根ながらに咲く花の名は人めけるゆふがほの宿
氷室

たれしかも夏なき年をおくるらむ氷室もるてふ山のとかけきは
尋氷室

ゆきて見むかけをぞたどる氷室山こゝもかしこも深き木立に

朝氷室

今朝はとくみつぎそなふる氷室守山路も夏のほかよりやこし

名所氷室

いにしへの氷室もりけむ跡見えてその名のこれる山の木深さ

夕立

ゆふだちし名残もすゞし一むらの雲ゆくあとの山はみどりに
待ち出でゝ夏の外なる雲風をしばしと思へば過ぐるゆふだち
風やとき雲やおそきとはげしさの雨にさきだつゆふだちの空
一とほりゆふだつ風をさきだてゝやがてふりくる雨の涼しさ

夕立早過

桃葉御集第五句「夕立の雲」に作る、

桃葉御集第五
句「雨もあし
とき」に作る、

雲風はほどなく過ぐるゆふだちのなごりもあかぬ軒のした露
程なくて晴れぬる雲のゆくへとやよそに夕だつ雨のあしとき
遠夕立

いく里の日影にやまづ雲風のゆくてすゞしく見ゆるゆふだち
山よりもあなたに過ぎてなるかみの聲さへきかぬ夕立のそら

山夕立

かげむかふ入日もすゞし夕立の端山まぢかく晴るゝみどりに

嶺夕立

夕立にぬれしころもやのこる日のみねにかけほす天のかぐ山

行路夕立

道のべのあまやどりして松かげに晴るゝまおそき夕立のそら

河夕立

みなかみは一むらくもるゆふだちに岩なみはやくにごる山川
ふりくるはまたみなかみの夕立に一すぢにごるすゑの川なみ

村夕立

吹く風もはやしのこずゑうちなびき夕だつ雲の一むらのさと

雨後蟬

雨はるゝなごりの露にところえてしげきにきほふ蟬のもる聲

朝蟬

明けたてば蟬の羽衣ほしもあへず鳴くや夜の間の露の木がくれ

山路蟬

蟬のこゑ木々に涼しき夕かげを駒のイもすゝみて行くこゝろかな

杜蟬

日ぐらしの鳴く夕かげは杜の名のけしきに近き秋もしられて
鳴くせみの聲もみだれて風たかき杜こそ夏も知らぬすゞしさ
夕づく日かげろふ杜のこがくれに露をもとむる蟬やなくらむ
鳴く蟬のこゑきく袖も木のもとに身をかへてける杜の涼しさ
木がくれて蟬なく杜の涼しさは羽におく露も見ればかりなる
こゝかしこ蟬鳴くかげに立ちよりてやすらひがちの杜の下道

杜間蟬

やすらひに聲さへそでのすゞしきはげにせみの羽の衣手の杜

林蟬

秋の色をまだきにいそぐ林かと木々にしぐるゝ蟬のもろごゑ

桃葉御集第二
第三句「聲き
く袖のすゞし
さは」に作る、
桃葉御集第三
句「林こそ」に
作る、

瀧邊蟬

山とよむ瀧のひゞきにまじりてもいづれたかけむ蟬のもろ聲

樹陰蟬

秋またで木々の雫もちるばかり蟬なきくらすかげのすゞしさ
身をかへしかげにややがて鳴く蟬の聲きゝそむる杜の木深さ
かげしげみ梢にたかく残る日のありとも知らで蟬や鳴くらむ

桃葉御集第五
句「杜の木高
さ」に作る、

蟬聲秋近

秋風のしらべもよほすこずゑさへこの比すゞし蟬のもろごゑ

晩夏蟬

聲のうち夏やくるらむ鳴くせみの端山のかげは秋風ぞ吹く

晩夏蟬聲

夏もはや末葉のつゆのこがくれに秋まつとなき蟬や鳴くらむ

扇

草も木も一葉うごかぬあつき^{かつき}日の風はあふぎの外にやはある^み
こむ秋もすてじないくよ袖なれて月もかくさぬ^か閨のあふぎは
朝夕の手にならし來て秋風のふかばすつべきあふぎともなし

扇風

涼しさを手にまかせては大空の風をもやどすあふぎとや見む

扇風秋近

袖に吹くおなじあふぎの風もなほ秋とほからぬ此はすゞしき

閨扇

たとへ見るあふぎにこれも残りけり月より後のねやのさよ風

閨中扇

閨の戸をさゝぬに暑きよひくは枕もとら^もでとるあふぎかな

避暑

南よりかをるをまつと明けわたすみすの下風あつさわすれて

樹陰避暑

來ぬ秋を袖になれゆく木蔭かなゆふべは風もあひやどりして

泉

月もすむしみづがもとは夏としも知らぬながれに枕しつべし
わき出づる岩根木のもとかげ深み^く夏とは知らじ水のこゝろも

對泉

秋風もわきていづみをむすぶ手の葉にあかぬなつの日ぐらし

松下泉

清水せくいはねの落葉かきはらひすゞしき暮を松のしたかげ

水風涼

これもまた水より出で、水よりもすゞしとやいはむ池の夕風

水風夜涼

くる、夜はあつさながら□やり水の下よりかよふ秋風ぞふく

近水微涼生

袖にまつほどさへすゞしうき草の末葉をわくる水のゆふかぜ

晚涼如秋

夕すゞみこのまゝならば吹きそむる初秋風もいつとしられじ

納涼

桃葉御集「くるゝよりあつさなながし遣水の下のよなよなかよふ秋風」に作る、桃葉御集第四句「末葉をいづる」に作る、

桃葉御集下句「なほあかずより月は待つかな」に作る、

夕かぜの清くすゞしき端居にもなほあかずこそ月は待たるれ
このごろは夕日の後の端居にも待たれてのみぞ風は吹きける
しばしとてやすらふ松の下涼み暮れゆくまゝに猶ぞ立ちうき
いづくより吹くともわかぬ風をさへ猶まつ比の夕すゞみかな
夕づく日もらぬ木蔭にやすらひてくむ手涼しきみたらしの水
秋またで扇もこよひすつばかりはしるにふかす袖のすゞしさ
夕すゞみ月になりゆく端居してくらせるよひは夏としもなし

納涼忘夏

秋とこそ岩がき水のおばしまによるまであかずすゞむ比かな

納涼月

夕すゞみ暮るれば月を待ちいでゝよるも端居のあかぬ比かな

納涼風

いまぞしる櫻がもとの夕すゞみこゝをば風のやどりなりとは

麓納涼

ふもとゆく袖ぞすゞしき山風のこずゑはのこる日影ながらに
たちぬるゝ雫をさへも松のかぜ落ちてすゞしき山のふもとに
山風のふもとのくれにいづこかは眞柴をりしきまたも涼まむ

杜納涼

立ちよらむかげとやよにはこぬ秋もまだき北野の杜の涼しさ
ゆふすゞみ來ぬ秋かぜにこのごろはやゝ袖なるゝ杜の下かげ

杜邊納涼

神がきにつどへる袖のかへるさやすゞむ北野の杜のしたかげ

桃葉御集第二句「かげもやよには」に作る、
桃葉御集第五句「杜のした露」に作る、

野納涼

まだきより秋をしめ野の松かげはちよもへぬべき風の涼しさ

桃葉御集第三句「松かげ」に作る、

河納涼

水きよき河邊のまどる月まちてかへるまをしき夕すゞみかな

船納涼

すゞしさはこぬ秋風のひと葉かとゆふべの水にさす小舟かな

桃葉御集第五句「さそふ舟かな」に作る、

松下納涼

夏ごろもたつことかたき夕すゞみちよもへぬべき松の蔭かな

桃葉御集第五句「松の下かげ」に作る、

晩夏

ほどもなき夏の日かずか秋風はまだこと遠きあつさながらに
かぎりある日數に夏は水無月のあつさのこさでゆく空もがな

桃葉御集第五句「あつさながらも」に作る、

夏祓

みそぎ河夏はゆくせの夕なみや秋もさそひて立ちかへるらむ
河なみの立ちくる水もあすか風袖ふきかへすみそぎすゞしき
みそぎしてながせる麻の夕河にうきせ越えゆく波もよどむれ

杜夏祓

夏のゆく河邊のみそぎさよ更けてやがて秋なる杜のすゞしさ

瀬夏祓

いかで今日身のうき波をたちかへて嬉しき瀬にも御禊してまし

貴賤夏祓

この夕みそぎに罪をながす瀬もかみなかしもの人わきやせぬ

荒和祓

桃葉御集第五
句一人やわき
せぬしに作る、

桃葉御集第五
句一加茂の川
づらしに作る、

みそぎする今日をば秋のわたせかと夕波すゞし加茂の川なみ

六月祓

みそぎ川この夕なみの大ぬさやながれて秋によるせ見すらむ
うちなびき明日こそ秋の初風も吹くやみそぎの麻のゆふしで

夏天象

いつ晴れむながめともなき雲とちて五月の空はかきくらす比

夏日

雨もよに今日の日もまた曇るよりくるゝ待つまのせめて涼しき
暮れがたき暑さに今ぞながき日は秋遠からぬかげとしもなし

夏風

かげたかき松ふく風もひとことの秋をしめ野のゆふべ涼しき

桃葉御集第二
句「ながめと
もなく」に作
る、

桃葉御集第二
句「あつさに
今日も」第五
句「風としも
なし」に作る、

桃葉御集
「夏雲忽暎」
に作る。

夏くればみすまきわたす軒ひろみ袖にみなみの風ぞなれゆく

夏雲嵯峨

くれがたき日もかげろひぬ山の端の雲はあやしき峰を重ねて

夏雨

たちぬれぬ袖の暑さもはらふかと風さへそひてきほふ雨かな
さぞないかに竹のかはらのいほりして瀧の音きくよるの夕立

夏暁

秋またぬあかつきごとの涼しさに寢覺ぞ夏のそらおぼれする

夏晝

過ぎてゆくかげを惜しまば暑き日も怠りがちの晝寢せましや

夏山

花紅葉ほかのものかは夏山のしげるこずゑになにかもとめむ

夏谷杉

夏もげによそなるものと谷かげは水おとそへて杉の木ぶかさ

夏海

わたつみはぬれてもきると夏衣たつやかとりの沖つしらなみ

夏浦夕

夕なぎに晴れぬる浦のあつき日にいとほぞたく蟹の藻鹽火

夏居所

卯の花の垣根しわたしことさらに山里びたるすまひさびしも

田家夏

賤の女がうゑしをいつと穂にも出でぬ門田の早苗いそぐ秋風

桃葉御集第二
句「ぬはても
きると」に作
る。

桃葉御集第五
句「すまひゆ
かしき」に作
る。

桃葉御集第四
句「門田の苗
に」に作る。

夏植物

若葉見し梢も今日はふかみどりたゞときは木の色にしげりて

夏木

神まつる卯月の花のしらゆふはかけてをりから枝たわむまで
花にこし春もいくかの道とめてさくらがもとに涼むころかな

夏杉

ほとゝぎす心の松は見えずともたてる軒端のすぎがてになけ

夏柏

しげれなほ夕日をさふるこの比の木のもとならずならの葉柏

夏苔

わけてこし夏野の草のめうつしもみどりは苔にふかき色かな

夏動物

夏なればなれもぬるまの短夜をいかにわきてか鳥は鳴くらむ

夏鳥

つれなさのまさりがほにも有明の月いで、後なくほとゝぎす
こゝろせで水鶏はたゞく天の戸のあけなばをしき月の今夜を

夏獣

夏野ゆく牡鹿もしるや音になかむ秋をまはぎも花に待つとは

夏蟲

名もしらぬ蟲はまだきに聲たて、おのが時なる秋いそぐころ

夏〔雜〕物

草葉だになびかぬ暮のかぜなれどならす扇の手にはまかせて

桃葉御集第一
第二句一心せ
く水鶏ぞた
くしに作る、

〔雜〕字桃葉御
集に據て補ふ、

夏枕

いかにねむはらへどすだく蚊の聲に枕さだめぬ床のみじか夜

夏筵

更けゆかばきりくすもや聲そへむ霜おく夏の月のさむしろ
暑き夜をいをぬることぞかたしきの床の狭筵蚊はすだきゝて

夏衣

まだきよりかさねまほしき夏ごろも日も夕かげぞ袖に涼しき

行路夏衣

木かげ道ゆけばをりはへ鳴く音をもそへてすゞしき蟬の羽衣

夏絲

聞ちかく蚊の聲ほそきかた絲のよるくむすぶ夢ぞみじかき

松葉御集下句
「日も夕風に
袖ぞ涼しき」
に作る、

桃葉御集第二
句「蚊の聲ほ
そく」に作る、

夏旅

蔦かへでしげる若葉にわけかねてむかしおぼゆるうつ山道
暑き日をしばし忘れむ木かげだに夏野の旅はいかにくるしき

夏色

さゆる夜の霜よりしろく夏しらぬ眞砂の月のひかりすゞしき

夏香

はちす葉の露ふく風も池水のにごりにしまぬ香ににほふなり

夏聲

あらましくふる夕立の雨もよにひゞきそへたるなるかみの空

夏祝

見ても思へ世はをりふしも若竹の直きをあぐる風のすがたを

桃葉御集第五
句「香に匂ふ
らむ」に作る、

桃葉御集第三
句「民草の」に
作る、

いにしへの風をうつして民のくさとるてになびく姿をも見む

秋

立秋風

秋きぬと今朝ふきかふる風の音やまた木枯のはじめなるらむ

立秋曉

一年のなかばおどろくあかつきの夢のたゞちに秋は來にけり

一葉散林

桃葉御集題
「立秋散林」に
作る、

秋風のはやしを見よやまだきちる一葉は桐のこずゑのみかは
秋かぜのはやしが中にまづちるはいかなる枝の一葉なるらむ

西風飄一葉

今朝はまだ音にもたてぬ秋かぜを桐の一葉に見てぞおどろく

風告秋

このあさけ袖ふく風のすゞしさは聲なきものゝ秋をつげゝる

初秋

今朝のあさけ一葉おちそふ秋風にめにさやかなる露も亂れて

初秋月

夜ごろをもまだへぬ秋の露のまに月のかつらの枝は染めけり
吹きそむる秋風ながらもるかげの木のますくなき夕月夜かな
雲風はそのいろとなきゆふべより月のかつらの秋のはつかぜ

初秋風

木の間にはまだ聞きわかぬ秋の聲をまちとる萩のけさの初風
このごろの涼しさながら身にしむはこれやまことの秋の初風

桃葉御集下句
「月になりぬ
る秋風の空」
に作る、

桃葉御集第二
第三句「一葉
をさそふ秋風
を」に作る、

萩のおと桐の一葉のうへに今朝みせもきかせも秋のはつかぜ

初秋朝風

袖にふく色やはかはる秋きぬといはずば知らじ今朝のはつ風

初秋雲

きのふけふたなびきそめて初秋のそらめづらしき雲の色かな

初秋露

秋といへば露もよりにや散りそめて桐の一葉の上におきける

杜初秋

みたらしやみそぎはいつの河邊にもけさより吹きぬ杜の秋風

浦初秋

須磨の浦や身にしむ色の初風もせき吹きこえて秋は來にけり

桃葉御集第二
第三句「露も
やかくおき
そめて」第五
句「上にちり
ぬる」に作る、
桃葉御集第三
句「河邊とて」
に作る、

河初秋

立ちあへぬ秋さへしるし吹きかはる河は音羽のなみのはつ風

初秋扇

このごろのはつ秋風にわすれゆく扇やなれしそでをうらみむ

早秋

露見えてなびく淺茅の末葉よりまづ立ちかはる秋のはつかぜ

一葉ちる木ずゑばかりに吹きそめてまだ袖とほき今朝の秋風

早秋月

風の音も聞きだにわかぬ秋をまづ目にはさやかに三日月の影

早秋露

秋風はさそはぬ露もこのあさけ桐のひと葉とともに散りつゝ

桃葉御集第二
句「秋さへし
る」に作る、

桃葉御集第一
句「風の音」第
四句「目にさ
やかに」に
作る、

ちりそむる言葉の露も玉しきに千代のかず見む秋は來にけり

早秋曉露

秋きぬと袖にまづしる寢覺こそ身にしむ露のはじめなりけれ

山早秋

紅葉する時はまだこぬときは山あきやはわかぬ風ぞ身にしむ

浦早秋

すみよしのうらめづらしく吹きかへて松のこゑそふ秋の初風

新秋雲

これぞこの秋の色とは初風のそらより見えてなびくしらくも

新秋露

秋きぬと今朝しる露のよもにまづ散らば桐の一葉をも見じ

桃葉御集第五
句「はじめな
るらめ」に作
る、

早涼到

露しろき夕日がくれのあさぢふや風も待ちあへず秋に涼しき
吹く風も身にしみそめて夕月夜にしこそ秋のいろはしるけれ
三日月の秋ほのめかす涼しさはかげに添ひてぞ風も吹きける

早涼知秋

桐の葉はさそひさそはず秋きぬとまづ知る袖のけさのはつ風

残暑

吹くもまだ秋風ぬるみ手にならす扇のさそふすゞしさもなし
すゞしさはいつとか待たむ今日もなほ袖のよそなる秋の初風
秋風はいつそでふれむ閨の戸のおせどもさらすのこる暑さに

七夕

桃葉御集第二
句「かこつ逢
ふ瀬か」第四
句「これもい
もせの」に作
る、

稀なるをかこつ逢ふ瀬の天の川これぞいもせの中にながれて

待七夕

待つくれのおそきや年のわたりにもこえてうきせの天の川波
秋來ては幾日もあらぬを彦星の逢ひみるまでと數へてぞ待つ

七夕月

天の河くれまつ今日のわたり瀬や月のみふねに舟くらべする
天の河ながれにひたすともし火の見ぬ面かげも月にうかびて

七夕雲

天の川かよふ舟路にいとほめやおよばぬ雲のなみのさわぎは
さやかなるみそらにむかふ秋風の雲間もうれしほしあひの影
をりはへし雲の衣と今日見るも猶たなばたの手にや織るらむ

七夕地儀

ちりひぢの山よりたかく星合のまれの一夜もあきにつもらむ

七夕橋

たなばたの契やなれもならひきて今宵より羽のかさゝぎの橋
うちわたすそでこそ吹かめ世にしらぬもみぢの橋の秋の初風

七夕契

あだならぬそのかみの世の契とは今も星合のそらに知るらむ

七夕別

人のよのなごりにや似ぬ天の河としのわたりは遠きわかれに

七夕後朝

朝露にぬれこそ添はめたなばたのおきて別れし雲のころもは

桃葉御集第一
句「人の上の」
第五句「遠き
わかれを」に
作る、

今日よりはとしをわたりて心のみかよふうきせの天の川なみ

七夕艸草イ

萩すゝき折らぬもおなじたむけぐさ籬ながらに星やうくらむ
ことのはの手向をうくる星ならば露とる草もあはれとや見む

七夕草花

七草にそふる手向はうけよかし今日のことばの花ならずとも

七夕鳥

星合のけふとたのめてかさゝぎのより羽も同じ秋やまちけむ

七夕枕

あかず思へ名残やあらむたなばたにちよを一夜の枕かすとも

七夕衣

桃葉御集第五句「秋や待ちける」に作る、

桃葉御集第二句「衣かへさて」第五句「天の河波」に作る、

逢ふ星やころもでかへてうらもなく今宵かさねむ天の川邊に

七夕扇

星合の夜はまだあつし世にはなほすてぬ扇のかぜもかさなむ
あふぎとる手をばかさねて逢ふ夜半の涼しさそふる天の川波

七夕瑤琴

今日にあひて心ことなるしらべには河の堤やうつたへに聞く

七夕舟船イ

天の川むかへはこよひ漕ぐ舟のかぢの音をも聞くこゝちして

七夕祝

一寸ぢのねがひをかけてかす絲のすゑながく見む星合のあき
家々の道もねがひのいと絶えずまもれよろづ代ほしあひの秋

桃葉御集第二句「手をばかさも」下句「涼しささぞな天の河風」に作る、
桃葉御集第三句「しらべと」に作る、

名所七夕

空にかす衣もあらじあまびとのなにを手向のほしあひのはま

星河契久秋イ

世々の秋かけてや絶えぬ天の川としの一夜をたのむ逢ふせも

星河落簷

水きよくたゝふる殿の軒端より落ちてすゞしきほしあひの影

星河秋興

今もそのうき木にのらば天の河もみぢの橋のあきやみてまし

銀河如船

天の川わたせさやけき夕月のひかりやほしのつまむかへぶね

二星契久

桃葉御集第二
句一たいふる
波のしに作る、

天の川いまゆくすゑのあふせにもとほき神代の秋やかぞへむ

今宵織女渡天河

天の河としのわたりの遠づまやこの夕なみのたちる待ちけむ

織女待夕

われながら星やうらやむ天の河くれまつ程にかよふこゝろを

織女契

天の川もみぢの橋はよゝかけて絶えぬちぎりの色に出づらし

霧織女衣

これやこの天の羽衣きりこめて明くる夜をしむほしあひの空

牛女悦秋來

秋は来て一夜二夜をさらにまたいつかと星や待ちわたりけむ

代牛女述懷

あはれとや星は見るらむ人ごとにかくる願のいとかたきよを

鳥鵲成橋

今日ごとにかすてふ橋は鵲のはねをならぶるちぎり絶えじな
契あれやとわたる橋を織女にけふかさゝぎのおのがよりはも

閏月七夕

くはゝれる秋の一夜のおなじ名もこよひやうきせ天の川なみ

あへるたなばた

秋といへばあへる七夕うらみなき同じ一夜のつきぬちぎりに

萩

なほざりの人にも秋のこゝろをばもよほしぐさや風のした萩

桃葉御集第二
第三句一秋の
十日の同じ名
にし作る、

桃葉御集第三
句「うらむな
よ」に作る、

月前萩

さそふべき夢やいづこと尋ぬらむ月にねぬ夜の萩のうはかせ

萩知秋

蟬の羽のそでも吹きあへぬ秋風をいかにしりてかそよぐ萩原

萩風拂露

萩の露に待たれて吹かぬくれやなきおなじまがきの萩の下風

萩風似雨

ふり出で、軒もる雨と聞く袖のやがてもぬるゝ萩のおとかな

聞萩

吹くもたゞかごとばかりの秋風を軒端の萩のおとにたつらむ
うゑしより身を秋風のやどりにてうきをかたらふ萩の聲かな

桃葉御集第五
句「萩の葉風
も」に作る、

桃葉御集題
「夜深聞萩」に
作る、

深夜聞萩

うきをたゞかたらひふかす友とこそ風にねぬ夜の軒のした萩

朝萩

思ひあへぬあしたの窓にうき秋のこゑ吹きたゆめ萩のうは風
さびしさもをりからなれや萩の音の夕には似ぬ今朝の秋かぜ

深夜萩

ふけゆけば聞きしにもあらぬ萩の音にねぬ夜の枕驚かれつゝ
ひとりある秋の思のふかき夜にこととふ萩のこゑは身にしむ

江萩

住の江やほに出づる萩の末葉より松にもかはる秋かぜのこゑ
舟つなぐあたり人なきたそがれに江の波かけてそよぐ萩はら

桃葉御集第五
句「聲ぞ身に
しむ」に作る、

桃葉御集第三
句「音立て」
第五句「風の
萩原」に作る、

舟よする波かとまがふこゑ立てゝさわぐ入江のかぜのした萩

江上萩

四の緒のこゑをもとほく江にのこす秋のしらべや萩のうは風

江邊曉萩

萩のかぜ吹きしく波の入江にはうきね忘るゝあかつきやなき
をぎのかぜ波にふきしくよるのこゑ寢覺にすぎき江の村の秋

幽居萩

人けなくすみなすやどの秋かぜにありとしられてそよぐ萩原
うき身世を秋の風にもしられじとおもひしやどにそよぐ萩原

萩似人來

風吹けばそよ待つ人とおどろくもならはぬからの宿の萩はら

桃葉御集第五
句「そよぐ萩
かな」に作る、

桃葉御集第五
句「萩にふく
風」に作る、

こよひ誰がくるすの小野のとばかりに聞けば嵐の萩にふく聲

萩近枕

木の間や聞きけむよるの秋風をやがてまくらの下萩のこゑ

聞萩歎枕

まくらとふ風の下萩おきかへり聞けば身にしむ聲ぞたゆまぬ

萩聲驚夢

見し夢のまくらをもとのうき秋にかへすや風のした萩のこゑ

萩

刈らでおく古枝のまはぎ幾秋も花さきまさるかげを見すらむ

萩半綻

まだ咲かぬ片枝もあれや宮城野のもとあらの小萩花もまばらに

桃葉御集第三
句「幾秋に」に
作る、

桃葉御集第一
句「咲きさか
ず」に作る、

咲きさかぬ枝わく萩の花の色に今朝おく露もなかばそむらむ
咲く萩のわかむらさきにかつ染めてかた枝花まつ春日野の露
今日はまだ咲かぬもおなじ眞萩原花ある枝のかずやくらべむ

月下萩

かげやどす月もや枝におもからし風をまつまのつゆの秋はぎ

雨中萩

木の下にさけるもぬれて花のいろの雨にまされる宮城野の原

萩露

咲く萩の上にみだれてみやぎ野の木のした露も色かはるころ
待たれては吹くとは見れど秋風にこゝろおかるゝ萩の上の露
しばし見む風をな待ちそ萩が枝の花にも葉にもおけるしら露

桃葉御集題
「月前萩」に作
る、

萩漸盛

思ふぞよあすの盛のいかならむきのふにまさる今日の眞萩に
まはぎ原さきあへぬ枝もまじれども今日さへ花は盛とぞ見る

原萩

まはきはら花にうつろふ露わけて袖もいろなるみやぎ野の原

野萩

よりあはせ織るや絲萩いとすゝき花のにしきぞ今さかりなる

野外萩

みやこには見ぬ色そへて眞萩はら鹿たちまじる春日野のはら
ませゆひてめづるは同じ花も似ずところがらなる野べの萩原
立ち歸り手折りてもゆけ明日もこむと思へど遠き野邊の萩原

桃葉御集下句
「花野の錦今
さかりなり」
に作る、

桃葉御集第五
句「野邊の萩
」に作る、
桃葉御集第三
句以下「明日
も見むと思へ
ば遠き野邊の
萩」に作る、

野徑萩

わけぬれて色こき萩のすり衣つゆのみだれはあかぬ野邊かな
宮城野の露わけごろもたてぬきにみだれてすれる秋はぎの花

萩満野徑

咲きみだる花をばよきて小男鹿のわけしみち行く野べの萩原

野萩似錦

野邊にしくにしきをりはへ来てみればうら紫の萩や散るらむ

野亭夕萩

野邊の庵かたしく袖にあまりてやくるればやどる萩の上の露

行路萩

心あらばはらはむものをあともなくたが露わけし野べの萩原

桃葉御集第一
句「わけぬれ
ど」に作る、

桃葉御集第一
句「わけしあ
とゆく」に作
る、

花にぬれ露にうつろふ袖と見てわけこそあかね野邊のはぎ原
たまほこのゆくもかへるも眞萩原花すずりみだるも色イやそはまし

水邊萩

かげ見えて萩のしたゆく河波も花になかけそうつるてふ名を
かけとめぬ萩のしがらみ花ながらながれて惜しき玉川のなみ

萩映水

水のあやに底のかげさへをりはへてにしきをたむ風の秋萩
花のいろ玉のえだをもうつしとるかかげやよどむせ萩のした水
花の枝になみこそすばかり咲きこぼれかげも色こきはぎの下水

河邊萩

かち人の野路の玉川ころせよわたらば萩のにしきしくころ

崎萩

舟よせて見しはわすれじまはぎはら野島が崎の秋のゆふぐれ
見よやこの野島の蟹の秋のそでころならでも萩がはなずり
たが秋にみそめの崎の萩のうへに残ることばの露をかけむ

禁庭萩

眞砂路は咲きうづみたる花のうへに露ぞ玉しく萩の戸のあき

遠郷萩

うつろふを秋のさが野の萩のうへに心もおかぬあさゆふの露

籬萩

おなじくば野邊遠からぬ宿に見む牡鹿なくてふ萩のまがきを

萩移袖

桃葉御集第五
句「秋の夕波」
に作る、

桃葉御集第一
第二句「たが
秋かみるめが
崎の」に作る、

桃葉御集第五
句「あさぢふ
の露」に作る、

桃葉御集第五
句「萩のさか
りを」に作る、

袖の色をおのがものからあかず見て心にそむる萩がはなずり
萩欲散

散りなばとすれる衣の袖にのみ明日はまはぎの色や見てまし

秋心寄萩

百草のなかにむかしもめで、こそ植ユリイゑしをおもふ萩の戸の秋

女郎花

あだなりしたれ秋かぜに女郎花むすびもとめぬ露みだるらむ
白露のたまかづらして百草のなかになまめくおみなへしかな
女郎花なにあだものゝ露にしもこゝろよわくて靡きそめけむ
女郎花なびきなはてそおきとめぬ露のこゝろはあだの大野に
野邊にふく風をつまとは女郎花いづれの秋かなびきそめけむ

仇ならむ名にこそたてれ女郎花よそにうつろふ色をやは見し
男山に立てるうき名もをみなへしたゞ一時の秋にやはあらぬ
たが秋に名づけそめてか女郎花はなになさけの露をかけ、む

女郎花隨風

名にめづるこゝろも知らぬ秋風にまかせてなびく女郎花かな

月前薄

ふくる夜はかたぶく月を招くとていとゞ尾花に風や吹くらむ

薄露

露ぞおく尾花がもとの草の名をほに出で、しをる袖のたぐひに

野薄

おきまよふ露もほに出で、初尾花秋のさかりを急ぐ野邊かな

行路薄

道のべにまねくを見れば秋風の吹くにまかする尾花ともなき

薄爲牆

秋のみぞあれまくかこふ茂りあひてもとの垣根を見する尾花に

薄似袖

わけすぎる袖のよそめやまがふらむ尾花もしろき野べの夕暮
招けとて植ゑおくやどの垣根かと尾花が袖にことやはまし
まねくにはとまらぬ誰を道のべにしたふ尾花がそでの露けさ
心なき尾花も秋のそでといへば誰がならはしの露けかるらむ

荇萱亂風

秋かぜの吹きしく岡へすゑはれて刈る手もまたぬかやが下折

桃葉御集第五
句「見する尾
花は」に作る、

岡荇萱

しづのをが刈りあへぬまの下折にわくる道なき岡のかやはら
みだれては下折れやすきかるかやをよきぬゆきゝの岡越の道

庭荇萱

こゝろせよかごとがましき荇萱のみだれもしらぬ庭のあき風

蘭薫風

ふぢばかま咲くむらさきの一もとにみながらにほふ庭の秋風
来てとへとさそふものから藤袴ぬし知らぬかは風もこたへず

雨後蘭

ふみしだくたがおもかけぞ藤袴ぬるゝ裾野のあめのなごりに

蘭露

桃葉御集第一
句「きてとへ
ば」に作る、

桃葉御集第五
句「雨のなご
りは」に作る、

朝露のしめるもふかきふぢばかまたが移香をにほひそめけむ

砌蘭

ふぢばかますそふみしだく誰にかもよそへて芝の砌には見む

草花

あるはうらみあるは招くも身にしらぬ尾花葛葉の野べの秋風

待草花

秋といへばこゝろの露もおきそめて初花いそぐ庭のはぎはら

草花盛

百草の花にくらべむいろもなし野もせに咲ける秋のさかりは
いろくくそむる露をもこきまぜてさかりにあかぬ秋の花園

風前草花

野分たつこの夕ぐれはつゆならぬこゝろも花のうへに亂れて

草花露深

はらひあへぬ尾花が袖もこのゆふべ風まつ萩の露をしるらむ

朝草花

朝なくもよほす露のほど見えて花になりゆく庭のもくぐさ
あかず見む花のいろく露けくになびくあしたの庭のもく草

野草花

このごろの秋は野もせのさかりにて千種の錦しくものぞなき

秋花

これもまた色のちぐさの秋風に花をおもひのつゆぞみたるゝ

翫秋花

桃葉御集題
「翫草花」に作
る、

桃葉御集題
「風動野花」に
作る、

いづれをか猶うゑそへむませのうち
に花の千種にうつる心は
風動野花

萩が枝に待ちとる野邊の秋かぜや千種ながらに露を吹くらむ
野邊は今ちぐさながらの秋の風尾花がうへのも
と見ましを
謹

いかに見む日影まつまのはかなさを露にあらそふ朝がほの花

露底槿花

うちしめり晴れぬる霧の下露に花おもげなる今朝のあさがほ

隣槿

咲きにけり隔つる垣のこなたまでかゝれとてやは植ゑし朝顔

籬槿

桃葉御集第三
句「そなたま
で」に作る、

いかに見むいとふ垣根の日かげにもおほふ袖なき花の朝がほ

露

數へみばいづれまさると晴るゝ夜の星や野もせの露にくらべむ

露脆

朝顔はしをれもはてぬ秋かぜに花よりけなるつゆそこぼるゝ

悲露

おきとめぬ露の心をあはれとは誰が袖よりかおもひきぬらむ

秋曉露

起きいでゝ見ざらむ露のひかりかは有明のかげのうす霧の庭

朝露

草のうへに白きを見れば朝戸出の袖にもふれぬ露ぞ身にしむ

桃葉御集第四
句「袖もふれ
ぬる」に作る、

桃葉御集第一
句「おきあへ
ぬ」に作る、

秋夕露

桃葉御集第二句「草木がうへに」第四句「こゝろならでも」に作る、

いかにおく草木がうへぞ憂きをわくこゝろなくとも秋の夕露
たが秋のおもひの露をならはしの夕となればそでにかくらむ

夜露

ひかりなき夜ごろの露をあはれとは影見し月も思ひおかずや

〔浅茅露〕

題桃葉御集に據て補ふ、

なべておく露よりけなる浅茅生はよをへぬ程に色さいやかはらむ

苔上露

やどるかげありともわかず夕月に露ふみしだく苔のかよひぢ

竹露

小枝よりこぼすと見るもうけとめて竹のしげみに深き露かな

桃葉御集第二句「ありともわいで」に作る、

枕露

夢さそふねやの秋風身にしみてむすびかへたるたまぐらの露

客衣露重

このごろの野山は朝な夕つゆにぬれつゝかさぬ旅のころもで

尋蟲

里人は今も嗟峨野のつゆ分けてえらびやすらむ蟲のこゑく

遠尋蟲

遠き野の風もしのばむ葛の葉のとはぬららみに蟲もこそ鳴け

野外尋蟲

今こむと頼めぬ野べに鳴く蟲もまつとしきかばこととはれつゝ

蟲聲滋

桃葉御集第二句「風もしのがむ」に作る、

桃葉御集第五
句「聞きもわ
かれて」に作
る、

浅茅生の小野の草葉にくらぶとも數まさるべき蟲のこゑく
様々の聲をまじへて鳴く蟲はいづれをそれと聞きもわかれず
蟲聲非一

桃葉御集第三
句「よる蟲の」
に作る、

さまぐの音をば野もせに鳴く蟲もおなじ思の露やわぶらむ
これもさぞ一つ思によるの蟲のさまぐ變る音には鳴くとも
月前蟲

おもほえずながむる影やふけぬらむ蟲の音すめる浅茅生の月
月になる夜をまつ蟲やかげやどす野もせの露に聲きほふらむ
露底蟲

草の原たれとへとてやおきうづむ露の下葉にまつむしの鳴く
うき秋のゆふべをわきて鳴く蟲はなにをおもひのつゆの下草

曉蟲

桃葉御集第五
句「聲のあは
れさ」に作る、

おのがうききぬぐならぬ曉をなにぞは蟲のうらみそめけむ

曉更蟲

有明のつきせぬ秋のおもひをやおのれひとりと蟲の鳴くらむ

夜蟲

桃葉御集第三
句「思ひをも」
に作る、

野邊の露にしきもよるのはえなさを蟲やちぐさの恨とは鳴く

深夜蟲

ふけゆけば露もさながら夜寒とや宵の間きかぬ蟲も鳴くなる
秋蟲のさせる思もそはじ夜にふくればいと々音を絶えず鳴く

原蟲

浅茅原とはれしいつの習ひとてまつてふ蟲の音をたえず鳴く

野蟲

鳴く聲はさまぐかへて鳴く蟲もひとつ野原の露やわぶらむ

野外蟲

そことなき露のやどりを誰とひてまくらかる野の松蟲のこゑ

島邊蟲

名のみして誰かは心かはしまの松のうきねにむしや鳴くらむ

山家蟲

おのが名に心とゞめぬ山ざとの寢覺もしらずまつむしの鳴く

田家蟲

いつまでのかげを頼みて秋の田のかりほの露に蟲は鳴くらむ

水郷蟲

里とほみとはれぬ月のかつら人いかにたのめとまつ蟲の鳴く

籬下聞蟲

野邊に鳴くこゝろも同じ蟲の音にせばき垣根やわれも忘れむ

閨蟲

閨の戸をイにこのごろよるの蟲の音もながきおもひをそふる手枕

床蟲

よどこねになれてもうとし蟋蟀あひかたらはぬ秋のおもひは

蟲聲近枕

このごろはやゝいねがての長き夜に枕がみなる蟲のこゑぐ

松蟲

いはしろや松の名だゝる蟲ぞ鳴くこの夕つゆのおのが草根に

桃葉御集第二
句「なれても
うしと」に作
る。

鈴蟲

あまた聞く中にまがはで鈴蟲のこゑふりいづる庭のくさむら

秋蝶護籬花

わがものと見つゝや花にとぶ蝶のまがきを去らぬこの比の秋

秋朝風

袖に待つゆふべは吹かですゞしさもたゞ朝風のはつ秋のそら

秋風満野

咲く花の千種ながらにうちなびきかぎりも見えぬ野邊の秋風

海邊秋風

いまでも誰うき秋風の須磨の浦にまたなき波のあはれ知るらむ

田家秋風

引きすてゝかへる門田のなるこにもなほ音のこる秋風ぞふく

月前鹿

鳴く聲鹿のあはれしらでも月に誰こよひ牡鹿のをしまでは見む

身にしめて聞けば深山の月をさへこゝに見せける小男鹿の聲

曉鹿

牡鹿なく遠山かづらながき夜のあかつきかけて妻やつれなき

曉聞鹿

見ても思ひ聞きてもあはれ深き夜の有明の山に鹿ぞ鳴くなる

夕鹿

夕月夜しかなく山のみねにだにいづくも秋とすめば住むらむ

夜鹿

いかばかりうき妻戀に小男鹿の今宵もいねずこゝら鳴くらむ

深夜聞鹿

ふくる夜を牡鹿のこゑも哀とは聞くだにいづれ妻やつれなき

鹿聲夜友

いねがてに我もなく音をたてそへば友なき鹿のいかゞきかまし

〔聞鹿〕

聞く人のたへぬ哀をおのが上にさしも知らでや鹿は鳴くらむ

鹿聲兩方

我ひとり音をこそたえねすむ山の峰にも尾にも鹿は鳴くなる

鹿聲増興

牡鹿なくゆふべはやどの眞萩をも聲のうちなる秋とやは見ね

題桃葉御集に據て補ふ

桃葉御集第二句「音をこそたてね」第五句「鹿は鳴くなり」に作る

咲く萩のわかむらさきも小男鹿のこゑのうちなる春日野の原

山鹿

ながき夜をひとりはねじと山鳥の尾上の鹿やつまこひて鳴く

外山鹿

まさき散る秋をかなしみ鳴く鹿のこゑきく庵は外山ともなし

深山鹿

鹿の音ぞそなたに遠き山ふかくおもひ入りてや妻をこふらむ

暮山鹿

入日影しばしと向ふをりしもあれおなじ尾上に鹿も鳴くなり

谷鹿

たにかげの松はつたへて山びこのこたへを友と鹿やなくらむ

谷かげはこそこの落葉をふみわけて牡鹿たゞずむ岩根木のもと

澗底鹿

思ひ入りて鹿なく谷の心をもしらずやおのがつまはつれなき

麓鹿

春日山やまかぜとほきふもとまで秋さむしとや鹿は鳴くらむ

林鹿

鳴く鹿の立つとも見えて夕日さす片山ばやしかげぞくまなき

野鹿

あかつきは夢野の鹿のそれならで妻とふ聲もあはれとぞ聞く

野外鹿

女郎花さく野の鹿は花の名におもひ出で、やつまを戀ふらむ

海邊鹿

波かけぬ袖もぬれけり牡鹿なくいそやまかげの秋のかりねに
おのが妻まつ夜明石のうらみわび鳴くやをのへの小男鹿の聲
牡鹿なくいそやまかげは夕月夜つなく小舟のかひよとぞ鳴く

田鹿

小男鹿もたへぬおもひや秋の田のほに出でけらし妻戀のこゑ
おのれまづほに出で、小田の秋の色を稲葉に急ぐ小男鹿の聲

田家鹿

もりあかす賤が門田のいねがてに幾夜かなるゝさをしかの聲
引板の音もなれぬる小田の小男鹿やもる庵近く來つゝ鳴くらむ
おどろかでは今は山田のひたすらにかよふ牡鹿の庵ちかきこゑ

桃葉御集第一
句「おのづか
ら」に作る、

秋窓鹿

山窓の秋をしづけみふしどもならぶばかりに馴るゝ小男鹿

鹿隠萩

咲く萩の下にかくれてふす鹿のいろにみだるゝ妻ごひのこゑ

鹿鳴秋萩

あさゆふの露いくたびかわけぬれて花に鹿なく野邊の萩はら

鹿聲近枕

夢うときいくよの友となりぬらむまくらの山の小男鹿のこゑ

鹿驚夢

聞きわぶるたれ夢も見むふくる夜を牡鹿の妻をこひあかす聲

旅鹿

桃葉御集題
「旅泊鹿」に作る、

桃葉御集第二
句「磯邊の山に」に作る、

舟とむる磯邊の山はなく鹿のうきねにかよふつまごひのこゑ

秋望

山々のふもとも見え立つ霧に秋のあしたぞ野邊ははてなき

秋夕

そのことゝ思ひもわかぬ世のうさのなぐさめがたき秋の夕暮

いつはとは秋はわかねど雲風もさらにゆふべの色ぞさびしき

浦秋夕

須磨の浦のあはれはよゝにながめきてまたなき浦の秋の夕暮

故郷秋夕

たが袖もぬれてひがたき夕つゆにふるさと人の秋をとほゞや

思ひやる袖さへぬれてなみだのみふるさと人の秋をとほめや

桃葉御集第一
第二句「須磨の波のあはれはよゝに」に作る、

桃葉御集第五
句「秋をとほめや」に作る、

見しよをばおもひの露のふるさとに誰が袖ぬらす秋の夕ぐれ

水郷秋夕

この里にあらぬ河邊の夕ぐれも秋は宇治てふ名にながむらむ

遠村秋夕

住むやたれ霧たつ秋の山もとに同じながめのゆふべならじを

秋夕情

雲風のそのいろとなき色をのみこゝろにそむる秋のゆふぐれ

秋夕催涙

なにゆゑとわかぬ涙思に身をくだくゆふべの色月はたゞ秋のそら

稻妻

おきかはる露も草葉にたづねてや所さだめずかよふいなづま

「秋夕」二字桃葉御集に據て補ふ、桃葉御集第五句「夕ならまし」に作る、

桃葉御集第二句「その色もなき」に作る、

秋田風

夕日さす山のふもと田風見えてなびくいなばの露ぞいろこきいなむしろ吹きしく小田の秋風にふす床しめて鳴く鹿もがな秋かぜに穂なみふきしく山もとに小田もる賤が庵も見えけり

秋田露

もる袖のしめりなそへそ夕つゆのいなばにぬるゝ小田の秋風けぬが上におくでの稻葉いましばしからずば露の眼をや見む

秋霜

よしや見よ千種ながらに秋の野の霜の花にはくらべぐるしき朝夕のつゆにはまだき野邊のいろをそむる一夜の秋のはつ霜

月

ながむるに物思ひまさるわが心さこそしるらむ月もやさしき
むかはむも思へばやさしよの秋めでしみはしの雲の上の月
見るまゝにくもりみ晴れみ秋の夜のながき思をそふる月かな
こゝにとくきて見むものと水鳥の賀茂の河邊のあきの夜の月
明月

こよひその光やは見むあきらけき月の名をかる珠はありとも

秋月明

かぎりあるひかりを空にあらはすや月もなかばの秋のひと比

秋月添光

秋をしもいかなる時とたぐひなきひかりを空に月はすむらむ

待月

宵のまのながきも秋にかこてとや待たれておそき山の端の月
秋の色はながめじとおもふ夕だにくるればいそぐ山の端の月
山の端のくもにさきだつ光さへつれなく見えて月ぞまたるゝ

對山待月

暮るゝ夜は山をぞかこつ月おそきころともわかぬ心いられに

臨水待月

山の端もうつろふ池のおばしまに出づる影見む月ぞ待たるゝ

海上待月

わだのはら波の夕風くれそめて月になる夜のみるめをぞ待つ

秋見月

長しとも知らぬ詠めに明くる夜をいづくは秋と月にかこちて

閑見月

見るがうちにわが心さへすみはてし月にぞ身をもおもひ慰む
ふけぬなりひとりおきゐて秋風の木の間の聲を月に聞く夜は

獨見月

年をへて思ひくまなき月見てもせめてものいふ友だにもあれ

深山見月

こゝろすむいづくの秋を尋ねてか深山がくれの月にくらべむ

見月戀友

とはゞやを見しよを月におもふ身の友も今夜や思ひ出づると

翫月

月はいつあく時あらむ秋の夜のちよを一夜のそらに見るとも

一本題「深山月」に作る、

桃葉御集第三句以下「しのぶよの友も今夜は思ひ出づやと」に作る、

連夜翫月

よなくは月のなさを三の友その一くさもすてぬまどるに

未出月

しばしとやなほかげ見せぬ山鳥の尾上へだつる月のかゞみは

月欲出

出でがての月もいまはと山の端のそらにさきだつ光みせつゝ

初昇月

待たれしも思ふに月のとがならじ峰よりのぼる影ぞほどなき

停午月

道もなく雲ふきとちよなかば行く月よりにしのそらの秋かぜ

稍傾月

桃葉御集第三句「とがならて」に作る、

ふけゆけば更にぞ惜しき今宵ありと最中の月にいひし名残も

三日月

なかぞらにしばしも見ばや三日月の入るかた近き西の山の端

新月

秋よなほながめもあへぬ夕より月は木の間のおもひそふらむ

上弦月

ぬる鳥もおどろきぬべし暮るゝ夜の木の間もり入る弓張の月

十五夜月

名にしおふ今夜やちしほてりまさる月の桂のあきのもみぢ葉
曇るなよよしくもるともみてる名の月に隠れむ宵ならねども

八月十五夜

桃葉御集第一
句一めでし
とに作る、

かくしこそ照りそふ秋の最中としてしひて幾夜の月に待たれし
名もしるくそふやいかなる光ぞと今夜の月のよごろにも似ぬ
めでしとは老いても見ずよ六十あまり八月の半名にしおふ影

十五夜晴

まだきよりよに似ぬ光空はれて月のゆふべの名こそしるけれ

寢覺月

まばゆきにさむる枕をそばだてゝねぬる夜をしむ窓の月かけ

〔立待月〕

いざよひの昨日影見し小簾の外に立ち出でゝ急ぐ山の端の月

居待月

よりゐつゝ待つ宵ふけぬ月にうき雲もあらしの槇のはしらに

風桃葉御集に
據て補ふ、

下弦月

なかぞらにかげ更けはてゝ入るかたの山の端とほき弓張の月
山ちかく見しにひきかへ入る影もしらぬよごろの弓はりの月

有明月

秋の夜にあまりてながき月影を我もつれなくながめあかして

十三夜

いにしへのひかりながらや我が國の秋にのこれる長月のかげ

十三夜月

見し秋のもなかよりけにおく霜もいのしろきを後の月のさやけさ
日あまりみてぬものから名にしおふ月は半の秋もやは見し
又たぐひなかばの秋のひかりにもまさきのかづら長月のかげ

秋風もみがきそへてよ玉くしげふたゝび月の名にしおふかげ
長月の月の名におふこよひまた見すやもなかの秋のひかりも

九月十三夜

もろこしに知られぬのみや名にしおふ今夜の月の隈にはあるらむ
てらせ猶わが秋津洲の外までも名の名とすべきながづきの影

月前風

秋風の夜さむもこれをはじめとや身にしむ色の月に吹くらむ

月前雲

光にも消えゆくほどのうきぐもはたなびく空もあかぬ月かな

月前露

更けゆけば野もせに月のかげ見えてはるゝおもひの霧の下露

草露映月

何をそのゆかりならでも草の原月やかなしむつゆをとふらむ

雨後月

有明は雨にふけぬとかこつ夜をまたなかぞらに月ぞ晴れぬる

曉月厭雲

雲にあふ月はことばのおもかげも有明の空をいかに見てまし

月似晝

かげやどす籬の露もひるまかとそらおぼれしてむかふ月かげ

明月似晝

くまなさは晝寢にむかふ日影かとたどる今夜のたまくら月

夕出月

桃葉御集第五
句「むかふ月
かなし」作る、

桃葉御集第二
句「山を出づ
るも」作る、

終夜月

いつしかと山を出でゝもくれぬまのうすき光ぞ月にわりなき

夜雲收盡月行遲

明けぬらし鳥の八聲をみだれ尾の長き夜あかぬ月はさながら

山月

待つほどはつれなく見えし山の端も月の麓にとほざかりつゝ

山月明

いづるより山口見えて照る月にまがふあたりの雲も消えつゝ

月出山

くるゝよりすだれ短くまきの戸にまたれて出づる山の端の月

桃葉御集第五
句「月のさや
けさ」作る、

山月入簾

まきあぐる小簾は一間の軒端より山の端ながら月ぞ入りくる

嶺月

雲かゝる峰の松原さはりおほみ待ち出づる月の思ひくまなき
うらむなよ待月れし山のあなたには見ざらむものを峰の月影
へだてつるほどはしばしの木の間にて月の下なる峰の松ばら

澗底月

いさぎよき水のこゝろを照してけろいや深谷がくれも月やどるらむ

杜月

散りまじる月のかつらの露もあれなしづくにぬるゝ衣手の杜

野月

桃葵御集第五
句「猶もゆか
しき」に作る、

くまもなき野原の月に草まくらむすびすてゝや猶もゆかまし
かぎりなき野もせの露の数々にかげをわけてもやどる月かな

野外明月

霧わたる四方のなかぞらひろき野に都わすれてむかふ夜の月

原上月

月やどる野原しのはらつゆ分けてあかぬたもとの萩が花ずり

關月

杉むらのかげわけいらで見える月やとめぬ關もるあふさかの山

關屋月

須磨の浦や關もるやどの軒端にもふけゆく浪の月はとゞめず

橋月

桃葵御集第五
句「萩の花ず
り」に作る、

こゝろとや衣かたしき宇治橋のながき夜あかぬ月にあかさむ
うちわたすもすそもあかず照る月のかげにひたせる水の浮橋

水邊月

かげやどす水のこゝろは速き瀬の波にとられぬ月のしづけさ

月照流水

ゆくものはかくこそありけれ河水に光とゞめず月もながれて

澤月

いづくまで心もゆけとかげひろき澤邊の月に田鶴も鳴くらむ

江月

おもひやる心をのする舟もあれな玉しく月のみまくほり江に

江月冷

桃葉御集題
「澤邊月」に作
る、

霜おかぬ蘆邊も月のしたかせにまづ色かはるなには江のあき

江上月

見てもなほ見まくほり江にゆきかへり幾夜かおなじ月の友船
たまつしま入江の月もすみよしの秋にかよひて影やへだてぬ

瀧月

瀧つせの中にありても流れゆく月にしばしの上どやなからむ
こよひ誰いほとほからぬ瀧のもとに心すみぬる月を見るらむ

河邊月

あかずとやみなれそなるゝ桂人ふねさすさをのながき夜の月

河月似氷

影ながらむすぶこほりと見るばかり月にぞしるきよるの川水

桃葉御集第一
句「見てもま
た」に作る、

海邊月

心ある蟹やわが身をうらにすむ月のみるめもかりそめにして
心さへ須磨のうらなみうちたえて月の夜ごろは夢や見ざらむ
わだのはら龍のふくめる玉もあらば底なる蟹や月をまがへむ

浦月

あまならぬたれこの浦の秋にきてなには思はぬ月を見るらむ

磯月

蟹小舟よるべき磯のみるめにもしらでやおきの月に漕ぐらむ

瀉月

夕なみのひがたもわかずしろたへにひかりみちくる月の出潮

渡月

桃葉御集第二
第三句「よる
べは磯のみる
めを」に作
る、
桃葉御集第五
句「月の出潮
は」に作る、

今夜たれすみだ河原のわたりしてみやこの秋を月にとふらむ
いづみ川かはせの小舟さすほども遠きわたりの月にあかして

湖月

出づるよりくもらぬ月のさ々なみに山や鏡の名をみがくらむ

湖上月

雲霧も海吹くかぜのあと晴れてにほてるひかり月にそひつゝ
月にふく志賀の浦風あと見えて干さとの影をたゝむさ々なみ
さゝ波にみがきそへてや影きよくうつるかゞみの山の端の月
月やそのもゝたびねれる鏡山いでゝにほてるかげぞよに似ぬ

泊月

鳥なく月のうきねのあかつきやもろこしぶねの秋のおもかけ

桃葉御集第三
第四句「さ々
なみや山の鏡
の」に作る、
桃葉御集第三
句「あと絶え
て」に作る、
桃葉御集第一
句「さ々波も」
に作る、
桃葉御集第一
句「月やそれ」
に作る、
桃葉御集第二
第三句「月の
うきねやあか
つきの」に作
る、

都月

海山の月はいかにとむかふ夜にみやこの秋をたれしのぶらむ

禁中月

思ふにも雲居はるけし言の葉のさかしおるかさ月に見し夜は

社頭月

てらせなほその神山のその世よりかくこそ秋ぞみづがきの月

もろともにてらすひかりの天みてる宮居の月や猶あきらけき

古寺月

鐘も思へ飛鳥の寺の明日もあれど今宵は月をふかさずもがな

故郷月

住む人のあるよだにある蓬生に月ひとりすむあきやへぬらむ

村月

とはゞやな都のをちのむら人に野をわけて見る月はいかにと

里月

時わかぬ雪やふれるとまがふらむ吉野の里のありあけのかげ

水郷月

なべてよの秋にはかへてこの里は宇治てふ名をも月に忘れむ

この里の川づらきよくすむ影に月のうちなる名こそくもらね

とゞまらでゆく瀬に影をやどすより水なき空も月ぞなまたがる

遠郷月

めでゝたが見ぬよ露にけきあとふりぬ鳥羽田の月の秋の山かけ

閑居月

桃葉御集第三
句「村人も」に
作る、

桃葉御集第三
句「この里の」
に作る、

夜よしとも人にはつげぬ秋をへてすむ宿からの月ぞさびしき

田家月

桃葉御集第五句「とほく晴れゆく」に作る、

結びとめぬ稻葉の露にうつろひて月も假庵のやどりとや思ふ刈りあげてのこる稻葉の雲もなき門田の月ぞとほく晴れたる

田家見月

桃葉御集第五句「露まよふらむ」に作る、

秋風のそよぎしつまが月ふけて門田のいなばつゆまよふなり

隣月

心こそなほあくがるれ月に吹くとなりの笛のおとすめる夜は

秋苑月

桃葉御集第五句「音もすめる夜に」に作る、

花園のつゆにたはれてぬる蝶のゆめもさむべき月のくまなさ

閨月

月こそあれかげもる閨のいたまより嵐もいくよ袖をとふらむ

月前松

秋かぜの松も世に似ぬこゑすみて月にふりぬるよるの神がき

月前松風

何とまたこゝろづくしの秋のこゑを木の間の月に松風ぞふく

松間月

里までのまつばらとほくゆく道にやどりさだめぬ袖の月かけ木の間もる軒端の月ぞあきらけき松の葉數もかぞふばかりに

松間秋月

風すさぶ松はわりなき木の間に影さだまらぬ月ぞふけゆく

月照松

名にしおふ松の一夜をあかじとも見ばやとぞおもふ神垣の月

松月幽

幾夜半の月にこゝろをつくせとて軒端の松は木の間すくなき
もりきては黄金をしけるかげもあれど松の木の間ぞ月は少き

月前竹露

葉をしげみおき^{クイ}る露もかげとめて月も夜ながき窓のくれ竹

浅茅月

ところせき露をも庭のひかりとは月にぞ見つるあさぢふの宿

月下浅茅

かげやどす露も夜ふけてさむからし月にうつろふ庭の浅茅生

月前猿

桃葉御集題
「月前風露」に
作る、

桃葉御集第五
句「猿も鳴く
らむ」に作る、

桃葉御集題
「月下遊士」に
作る、

「棹月」二字桃
葉御集に據て
補ふ、
桃葉御集第四
句「忘れて見
すや」に作る、

山人は出でにしあとに月ひとりすめるやわびて猿も鳴くらし
今夜すむ月の名におふ山のかひありとも知らで猿やなくらむ

月前遊士

いく夜としらでやあかずたはれをの月にうかる、秋の心は

釣夫(棹月)

あま小舟こよひも月のいとなみは忘れて見ばや波のうへの月

依月客來

思ひ出で、おなじ心に見し友やあはれこよひの月をとひける

月秋友

秋の心しるらむ友と身のうさもかたるばかりにむかふ月かな

月多秋友

桃葉御集第五
句「月を友人」
に作る、

ちよの秋をあかぬこゝろにまかせても見ばや今夜の月の友人
月生涯友

この世にていかゞうとまむ秋の月老となるをも忘れこし身に

寄月旅

旅のそでさぞな野山の露わけてぬるゝがほなる月を馴れ見む

月鞆中友

故郷をかたるばかりにむかひては月は旅寝のともとなりける

月旅宿友

都よりしたひきにけり友ぞとや月はたびねをなぐさめてとふ

船中月

あくがるゝ心に乗りにてこぐ舟やひとよあかしの月にたゆたふ

月照衣

ふけゆけば霜もおくかとしろたへの衣手さむき月のしたぶし

月似弓

しらまゆみおしてふけゆく空に今入るかた遠く見む月もがな

月前鐘

鐘の聲たれかは聞きもおどろかむ更くるにそひてすめる月影

月前聞鐘

月見つゝ更くるもしらぬ秋の夜にいくたびかねの驚かすらむ

月似古

末の世の秋とてたれかめでざらむ月はむかしの同じひかりを

名所月

桃葉御集第五
句「同じ光に」
に作る、

あたら夜をあかしの月の恨あれや心なき蟹カニのみるめばかりに

廣澤池眺望

しほがまの昔のあきはいさしらずみやこの月のひろさはの池

寄月眺望

まつらがたもろこし人のみるめとやおなじ千里の波の上の月

月前遠望

田子の浦にたれがうちいで、富士のねの雪も輝く月を見るらむ

月前述懐

いにしへに面がはりして見るらむとイ代々の雲居の月にやさしき

月催涙

月影にいざなはれてや落つとしもおぼえぬ露の袖ぬらすらむ

月契秋

秋といへば光かはらでながめきぬ末もくもるな夜半の月かけ

月契千秋

千世かけてくもらじ月のあきつしまやまとの國はおなじ光に

月不撰處

あふぎ見よわが秋津洲のほかまでもあまねくてらす月讀の影
世にひろき恵をよものひかりにていづくへだてぬ神がきの月
海山にさこそはてなき月をたれこよひはにふの軒端にも見る

寄月祝言

幾世々の秋にもつきじ雲の上の月もてはやすやまとことのは

残月越關

桃葉御集第五
句「月讀の宮」
に作る、

おきいでし夜はふか、れや鈴鹿山關路はるかにおくる月かげ
起きわびぬ月もありあけの秋たけて身にしむいろの白川の關

瀧邊殘月

さらぬ夜の瀧のおとにもこゝろすむ寢覺の山のありあけの床

海邊殘月

しらみゆく月にまかせて清見瀉せきもる浪もかげはもとめず

惜殘月

をしとこそ見つゝあかさめ曉のくもにもあかぬ月のこよひは

惜月

長月のなごりをさへにとりそへてをしとおもふ夜の有明の月
入りがたの空すむ月のかげも見む霧なへだてそにし山の端

桃葉御集第四
句「せきくる
浪も」に作る、

桃葉御集第四
句「空にもあ
かぬ」に作る、

桃葉御集第五
句「有明の影」
に作る、

遅くなる夜ごとの月の有明に見るほどなさをあかずとぞ思ふ

獨惜月

ふけゆくと獨がために惜しむかな人はねし夜の月に起きゐて

桃葉御集第一
句「ふけゆく
も」に作る、

關路惜月

不破の關とめぬ旅寢の月もしれもりなすてそとおもふ今宵を

初鴈

聲はしてそれともわかず過ぎぬるやいづくの雲の衣かりがね
遠くこしほどを思へばもろこしの秋にも似たる鴈のたまづさ

遠初鴈

あまぐものよそにかきける玉章やこゝに見わかぬ鴈の一つら

南北鴈

桃葉御集第二
句「よそにか
きけむ」に作
る、

桃葉御集第四句「見おくる空の」に作る、

今くるもや、ちかくなる鴈がねは見おくる雲の友したふらし

月前聞鴈

鳴きてくるをりしもあれや隈もなき月によこたふ鴈の一つら

一本題「雲間初雁」に作る、

雲間聞鴈

さやけしな月はいざよふ雲間よりまづもれいづる初鴈のこゑ

そなたぞと聞けば見そむる夕ぐれの雲間もうれし渡る鴈がね

雲端鴈

秋風の雲にたぐひてとぶ鴈はおくる、つらぞまがふくまなき

霧中鴈

鳴く鴈やなみだあらそふ草も木も露けき今朝の霧のしづくに

霧中初鴈

桃葉御集第一句「そなたに」とに作る、

峰いくへ越えてもおなじ朝霧のはれぬおもひに鴈や鳴くらむ

初鴈交霧

世にしのおたが玉づさかかけてこし霧のまよひの鴈の一つら

湖上鴈

さゝなみの遠きむかしは志賀の浦に聞くや都の秋のかりがね

山家初鴈

まれに見るたよりもまたぬ山里にたがたまづさの初鴈のこゑ

蘆邊鴈

あしの葉のおもひみだれて鳴くや鴈江の水さむき秋風のくれ

夕あさりこゝにと思ふひとつらの鴈や蘆邊をさして落つらむ

鴈似字

朝霧のうへゆく鴈のひとつらはあやしき鳥のあとばかりなる

鴈成字

かきそめしたかよの筆の跡とほくならひこしぢの鴈の一つら

旅鴈鳴雲

はるくとみやこの雲のみなみまでいまだ旅なる鴈のなく空

霧

朝ぎりのがすみあはれむ春も千重まさる秋の霧にはくらべぐるしき

鴈のくる朝けおぼえて夕月夜みねまで晴れぬきりわたるそら

曉霧

やまかづら曉かけて立つ霧になほながき夜のあけむともせず

明けぬまはたゞ朝霧の立田山吹きあへぬ風にかをりみちつゝ

桃葉御集第四
句「みねまで
晴しす」に作
る、

朝霧

峰はるゝ日かげ待ち出で、ゆく袖もなほ山風の霧やわくらむ

夕霧

こゝろしてふもとになびけくれはてばてい月もまつべき峰の秋霧

霧染山

いくちしほ染め渡すらむこのごろの霧ふかくなる秋の山邊は

林霧

朝日さすかた山ばやしほのくと木末見えゆく霧のうちかな

河霧

山もとに立つ川霧もほのくとあけのそほ舟いろぞ見えゆく

堤上霧

桃葉御集
「霧深山」に作
る、

桃葉御集第五
句「色に見え
ゆく」に作る、

いつも見る柳のつゝみそことなきゆふべの霧にからす鳴く聲

崎霧

はらへども一木の松の秋かぜは霧のそこなる志賀のからさき

〔渡霧〕

あけやらぬ淀のわたりか河風にひとすぢ霧のひましらみても

〔古渡〕秋霧

小船のみ霧間に見えて人もなきわたりさびしき秋のゆふなみ
人もなきゆふべの霧の深き江にわたしすてたる舟ぞよこたふ

〔古渡霧深〕

すみだ川かはづら見え立つきりに都鳥さへたゞ名のみして

霧中求泊

鳳桃葵御集に
據て補ふ、

〔古渡〕三字桃
葵御集に據て
補ふ、

鳳桃葵御集に
據て補ふ、

ともし火の明石の泊いづくともくれずば知らじ霧のうちかな

水郷霧

はやき瀬の波もさそはで網代木のいざよひのこる宇治の川霧

田家霧

かりほもる袖にも露はおくて田のいなばにさそふ秋の夕ぎり

遠村霧

山がつかへる山路もたどるまで夕霧ふかし野邊のをちかた

霧隔舟

霧のうちにまきのを山は猶見えてゆくへかはらぬ宇治の川舟

曉霧隔舟

あくる江の月にさをさす音はしてゆく舟見えぬ霧の夜ぶかさ

桃葵御集第五
句「宇治の朝
霧」に作る、

擣衣

はるかなる旅寝の秋の露をさへ袖にかけてやころもうつらむ
あはれたがへだつる中の衣とてたゞうつたへに聲うらむらむ
ひとりあるおもひはしらぬ山賤もおのが夜さむの衣うつらし

擣衣寒

さらぬ夜の寝覺もさむき秋風のいろまされとかころもうつ聲

聞擣衣

山がつの夜寒のころもかす人もあらばきぬたの音やすさまむ

遠擣衣

都にはまだき夜さむを山ちかき里よりつげてころもうつこゑ
野邊ちかき庵よりこゝにたぐひきてたえどなれや風の砧は

桃葉御集第五
句「聲うかる
らむ」に作る、

擣衣幽

夕月夜ほのかなるにぞあはれをもうちそへて聞くしづが狭衣

擣衣近

賤がすむやどりのさまも見つゝ聞く砧やいとゞ聲のかなしき

近擣衣

小夜衣うちもたゆまぬ聲々にいねがてなれや小屋のならひは
聞く人を夜さむの友とあしがきのまちかきやどに衣うつらし

月下擣衣

ながめつゝねぬ夜の月に聞けばまたよその砧も聲はうらむる

擣衣到曉

月かげのしらみはてゝや山かづらあかつきかけてたえぬ砧も

桃葉御集第五
句「小屋のな
らひに」に作
る、
桃葉御集第五
句「衣うつら
む」に作る、

泊擣衣

波風のうきねの友やあまの子のさだめぬ宿にころもうつこゑ

里擣衣

秋風のさとをばわかぬ夜寒にやをちこち人のころもうつこゑ

田家擣衣

刈りあげし田面の里のいとまにやこゝもかしこも衣うつらむ

隣擣衣

衣うつこゑに目さめて山がつの夜さむかたらふ宿やまぢかき
衣うつ音ぞねられぬともし火をそむくる壁のへだてばかりに

松下擣衣

ころもうつ音ぞたゆまぬ嵐ふく松をばかげとたのむいほりは

桃葉御集上句
「秋の風里を
もわかぬ夜寒
とや」に作る、

桃葉御集第二
句「音もたゆ
まず」に作る、

待人擣衣

待ちわびてせこが衣をうつたへに語るばかりの聲ぞ^{はい}うらむる
まちわびてせこが衣をうつたへにうら淋しかるよなくの聲

月前鳴

おのがすむ床まで月のくまなきもうき數なれや鳴のはねがき

曉鳴

思ふことかぞへしるかとありあけの月に數そふ鳴のはねがき
たが秋のうきをかぞへし寢覺よりかくかずならし鳴の羽がき

野鳴

大方のあはれは知らぬ野守だにかゝ寢覺のしぎのはねがき

田鳴

山田もる身のうきかずを誰とひてこゝにこたふる鳴の羽がき

澤畔鳴

おのがすむ所がらにやうきかずを澤□かぞふる鳴のはねがき
をりしもあれ秋に澤田のうきことをかきつめけらし鳴の羽搔

寢覺鳴

さめて後ねられぬまゝのうき數をかぞへてしるや鳴の羽がき

野亭鶉

かりにだに人はこぬ野のひとついほ鶉ぞ床をならべても鳴く

江鶉

秋といへば眞野の入江のうき事をおのれしらでも鶉ウなくらむ
なれのみや秋のおもひは深き江のうきを鶉と音はたへて鳴く

桃葉御集第四句「澤田にうきぞふ」に作る、桃葉御集第三句「うきことも」に作る、

故郷鶉

ふるさとはいとゞ深草しげる野といつよりなりて鶉なくらむ

岡葛

たへてすむ岡邊松イの秋を葛の葉のなど色に出で、恨みそめける

徑葛

とゞまらぬ道ゆく人をうらみてや袖ふきおくる葛のあきかぜ

野分

秋の色はあたりのこらじ巖をも吹きあげつべき今朝の野分に
亂れちるひはだ瓦をませのうちの花にもよきず野分ふくなり
ふりいでし雨もをやみて吹きとふく今朝の野分に雲まよふ空
あらましき野分になりて草木にもたへぬばかりに吹きしをる聲

桃葉御集第五句「恨みそめぬる」に作る、

桃葉御集第二句「あだに殘らじ」に作る、桃葉御集第五句「野分吹くらし」に作る、

故郷野分

桃葉御集第二
句「あれまそ
ひぬる」に作
る、

いとゞしくあれまどひぬる故郷を野分にさぞと問ふ人もなし

菊

桃葉御集第二
句「酔をす、
めむ」に作る、

くれなるに匂ふさかりも長月のすゑつみはやす菊ぞえならぬ
酌みかはし酔をすゝめに仙人の千代つみいるゝ菊のさかづき
新菊有餘芳

咲きしより秋風とほくにほひきて干とせもしるき菊のはつ花

菊花半開

咲きさかぬまがきの菊の花の上に露もなかはゝ色やそむらむ

菊久盛

めであかぬさかりやいくよ霜にさへ色そめかへしにほふ白菊

桃葉御集第五
句「匂ふしら
菊」に作る、

草も木もうつろひかはる露霜のあきをときはに匂ふきくかな
こと草の花はのこらぬ霜の後にあらはれけりな菊のさかえも

秋菊盈枝

色香もや小枝に今朝はおもるらし花にかさなる花のしらぎつゆい

菊花久馥

あかずおもふこゝろの花の白菊はちらでちぐさの秋や匂はむ

栽菊

咲き出づる菊ぞ世に似ぬもゝぐさの後見むためとうゑし籬に
名にしおはゞこゝろ山路の宿の菊うゑて千年の秋までも見む

挿菊

千代もへむ今日の挿頭にさしそへて咲出づる菊のふりぬ色香は

桃葉御集題
「挿頭菊」第一
句「千代も見
む」に作る、

菊露

仙人のちとせをためし菊のつゆかこちよせても契るやどかな
立ちよれば手折らぬさきにかつ散りてまづ袖にほふ菊の下露

菊霜

霜の後さかゆる色をまづ見せて松にならはず千代のしらぎく

毎朝望菊

をりふしの色あひなれやこのあさけ昨日にも似ずにほふ白菊

終日對菊

袖ふれし菊の朝つゆひるまをもわかずながらにめづる夕ばえ

橋邊菊

菊さけるながれこそ□□仙人やいまもかよへるたにの岩はし

桃葉御集第五句「むかふ夕ばえ」に作る、

河邊菊花

花をせくためしまでこそくみしらねこの谷川も菊のしたみづ

菊滿庭

うゑそへてところせきまで咲く菊に庭は山路を見する秋かなセイ

園深菊決榮

千代もつくしなべてうつろふ花園の霜にさかゆる菊の色香は

籬菊

朝露もひかりをかして咲く菊のまがきは星のやどりとや見む

籬菊露芳

咲く菊のまがきにちかき袖とめてにほみをゆづれ露のおひ風

菊粧如錦

桃葉御集題「籬菊露香」に作る、

桃葉御集第三句以下、園の霜にさかゆる菊の移る色香は「」に作る、

桃葉御集第四句「この谷川の」に作る、

からにしき織るやいくむら園の菊この朝露をたてぬきにして

菊花薰枕

かをりきてあかぬ寢覺の宿の菊

翫菊延齡

ためしありときくの下水くみ見てやあかぬ心に秋をまかせむ

伴菊延齡

今日ごとの色香にあかで菊の露ふちとなるよの秋もへぬべし

菊爲花第一

咲く菊やあまつ星かと雲のうへに上なき花のひかり見すらむ

菊香不知春

さく菊に立ちならびてはとばかりや折しる春の色香なるらむ

名所菊

鴈なきて咲きぬる花のをりにあへば春も思はぬすみよしの濱

重陽宴

いく千代といはふ言葉も菊の枝に花さきかはすこゝのへの秋
さく花もこゝのかさねの菊の枝に見し秋いつの露のことは
九重の菊にいつまでもろこしのことはの花も咲きかはしけむ

柞

はゝそ原おのがちしほの限とて薄きながらに散りなむもろし

柞紅葉

はゝそ原よその紅葉の千入とはいはぬ色しもあかずこがれて
はゝそはら染めよ昔も見つゝやといはたの小野の秋のつゆ霜

桃葉御集第二
句「いふ言の
葉も」に作る、

桃葉御集第五
句「あかずこ
そあれ」に作
る、

はじめみぢ

霜にあへず散りなむはをし檻紅葉よそのちしほの色も盡さで

蔦

心あれやわれとは染めぬ松が枝に秋を見せたる蔦のもみぢ葉

行路蔦

こえながらうつ山の山邊の秋を見て蔦の葉わくる岩根木のもと
つたひゆく岩根に染めてはふ蔦のふまゝくをしき秋の山みぢ

松蔦

蔦紅葉かけてはえあるみどりこそ春も見ざりし松のひとしほ

黄葉

千入ともいはじよまたじくちなしの色にもそむる心木の葉は

桃葉御集第四
句「蔦の葉わ
けに」に作る、

けふもまたはえなき露の下染にたへぬはゝその紅葉をぞ見る
ちしほとはいはで心もくちなしの色にこの比そむるもみぢ葉
木々はみな初しほぞめの薄紅葉かへでも色をわかぬころかな

里黄葉

山もとの秋よりあさきもみぢ葉に里わく露のこゝろをぞ見る

紅葉

玉垣のあけも木の間にかさなりて紅葉おくある杜のしたかげ

尋紅葉

染めもあへぬ深山の木蔭わけすてゝ猶おくふかき色や尋ねむ

初紅葉

西こそと露もわきてや秋の來るかた枝の紅葉まだきそむらむ

桃葉御集第一
句「染めもあ
へず」に作る、

翫紅葉

はえあれや染むる千入にこきまぜて見るも立田の山のもみぢ葉
擇紅葉

枝わかずそむる紅葉はいづれにか心のいろをそへて折らまし
紅葉未遍

まだ染めぬ梢もまじるもみぢ葉にわきけるつゆの心をぞ見る
紅葉遍

庭のおもの梢いろづく露にいま野山の木々はした葉そむらむ
紅葉淺

色うすき枝にもそむる心こそはつもみぢ葉のちしほなりけれ
紅葉深

桃葉御集第四
句「まづ霧ふ
かき」に作る、

あかず見る心の色もくらぶともくらべ苦しき木々のもみぢ葉
染めはてゝすゑつむ色のちしほをも手にまかせたる秋の山姫

紅葉處々

峰にそめ谷よりそめてはつ紅葉まづ霜ふかきところをぞわく

月前紅葉

露おつる月のかつらの下もみぢよるも見るべき色やそむらむ

雨後紅葉

ふりいでし夜の時雨のあと見えてくれなる深きけさの山の端

紅葉霜

夜のほどに染めます色もわかぬまでもみぢ葉しろき秋の朝霜

紅葉帶霜

桃葉御集第五
句「けさの山
もと」に作る、

桃葉御集第三
句「おく霜は」
に作る、

染めつくす限もしらでおく霜もなか／＼木々の色やくたさむ

山紅葉

桃葉御集第二
句「山も名に
こそ」に作る、

からにしき山の名にこそ立田姫こゝに織り出す色やうへなき
もみぢ葉の名に立田山いかならむ三室の時雨そめつくすころ

山皆紅葉

數知らぬちしほの梢かさねあげて紅葉ぞ山をなべて染めける

岡紅葉

露霜もそめのこそす色を夕づく日さすやをかべの紅葉にぞ見る
折りとれば散りぬる枝のもみぢ葉やひろふゆきゝの岡越の袖

杜紅葉

心さへ色のちしほにそめはてゝもみぢにまじる杜の木がくれ

林葉漸紅

露霜にぬれてひがたきした葉とやわきて林のかげは染むらむ

瀧紅葉

桃葉御集第一
句「岩にそふ」
第四句「色に
も染むる」に
作る、

たきつ波こゆる下枝のもみぢ葉は散らぬも水の秋をそめける
岩にはふしづえをこえてもみぢ葉の色にぞそむる瀧のしら絲

瀧邊紅葉

音きけばそめぬ紅葉もさそふべき時雨とふるの瀧なくもがな

江紅葉

もみぢ葉はまことの錦あらふ江に見るも千入の陰やまがはぬ

紅葉寫水

舟よする岩根の紅葉見るかげはおよばぬ枝も折るばかりにて

桃葉御集第二
句「岸根の紅
葉」に作る、

河紅葉

立田川夜半のしぐれは枝をそめ波をそむるや今朝のもみぢ葉

岸紅葉

染めつくす三室の岸の下かげやくれなるくゝる水山イのみなかみ

里紅葉

初紅葉たがやどならむこのごろの軒端しぐれぬ里はあらじな

庭紅葉

染めはてぬ一木のもみぢ庭に見てうらやむ山のふかき露しも

紅葉出牆垣イ

青柳を春見しかきねおもひ出でゝ心もちしほ染むるもみぢ葉

紅葉一樹

たぐひなき物とぞめづるたゞ一木うゑて砌にそむるもみぢ葉

紅葉勝花

これもまたかすみに霧とさく花の春日わするゝ秋のもみぢ葉
春の花こゝにありともかはらじよ紅葉にそむる秋のこゝろは

松間紅葉

もみぢ葉はまだ朝霧のしたぞめにまじる松しも色をふかめて

紅葉交松

まだき散る紅葉はあやな松風のしぐるゝおとに色はまさりて
色はえて紅葉にまじる松が枝は秋なきときのみどりとも見ず

紅葉如錦

江にあらふにしきやこゝに立田川水底かけて染むるもみぢ葉

桃葉御集第二
句「ものぞと
めづる」第五
句「そむるも
みぢを」に作
る、

桃葉御集第一
句「春の花の」
に作る、

桃葉御集第五
句「色はまさ
らで」に作る、

旅泊紅葉

うきねして心をくだくとまりぶね磯山かげのもみぢむしろに

名所紅葉

たぐひなき色にそめけむ秋よりや名にも立田の山のもみぢ葉

原本題開く

よそに見し昨日のもみぢ折る枝にことばの露ぞ色をそへける

惜秋

とゞめてもなにをか秋の色と見む菊はうつろひ紅葉ちるころ

每人惜秋

誰も今をしむなごりはうきものに思ひし秋のゆくへともなし

山路秋過

かたみとはとゞめぬ秋のゆくあとみちいにのこる山路の霧のした露

秋欲暮

霜ならぬ野邊だにあれな慕ひみむ露のよすがに秋やとまると

暮秋

色かはる末野のあらし吹きまよひ秋のかたみは露もとまらず
ゆきやらで暫しやすらふ秋もあれなどいよもの紅葉のちりのまがひに
夕暮のあはれもいかゞ詠めおかむ色はとまらぬ秋のわかれに
ゆく秋のなごりとままらぬ野山とや露もあらしも色かはるらむ

獨惜暮秋

露のゆふべ月の夜ごとのわが袖も秋にしられてをしむ暮かは

暮秋月

桃葉御集第三
句「吹きまよ
ひ」に作る、

身にぞしむいまはの秋の別路にこゝろほそくも残るありあけ

暮秋露

長月の末葉もしろくくくれた夜の間のつゆの霜にかはれる

暮秋霜

秋のゆくみちしるべとも見るばかり草を冬野にいそぐ霜かな
行く秋よ何をかたみにおきて見む冬まつ霜はいふかひもなし
長月の末葉に見てぞたがならぬ霜のよもぎもおどろかれぬる

暮秋海

ありあけの月をかたみの浦なみにせめて秋なき花をだに見む

暮秋紅葉

またこむも遠山姫のあかずとや染めしこずゑの秋のくれがた

桃葉御集第一
第二句「ゆく
秋のあとだに
見てぞ」に作
る、

暮秋獸

いろづきし木の實は落つる枝うたひましらも暮の秋をしむ聲

暮秋鐘聲

聞きなれし入相のこゑの色も似ずいまはの秋の野山さびしき

暮秋夢

ゆく秋の菊やもみぢを思ひ寝のおもかげばかり夢にのこりて

惜九月盡

色見えてうつろふ今日の秋ぞうき紅葉に幾日そめしこゝろも

暮れぬとも今宵はおなじ袖の露におきわかれむを思ふ秋かな

閏九月盡

〔かぞへそふ秋の日かづも長月も猶をしまれて暮るゝ今日かな〕

桃葉御集第三
句「袖の露」に
作る、

二首桃葉御集
に據て補ふ、

〔かぞへずば重なる名のみ長月の今日くれぬとてしらじ程なき〕

秋日易暮

この比の秋よりぞ知る昨日といひ今日とて早く暮るゝ日影も

秋星

更けぬまに見えさす星のひかりよりはじめて長き秋の夜の空色イ

秋山朝

あけがたの月はをぐらの山の名にたつ朝霧は千重まさるらし

秋野

神のますあたりの野邊に咲く花のちぐさは秋の手向とやなるもイ

秋橋

秋のゆくみちしるべをいそぐごとはつ霜しろき山のかけ橋

たがこゝろ染めて楓の橋の名を聞きわたる夜の秋もひさしき

浸天秋水白茫々

しろたへの月をぞひたす沖つ浪あけわたる空雲イの海もひとつにかぎりなく見わたす水に秋のいろの白雲みてる空をひたして

秋河

月よりもなほ身にしむは更くる夜のあらしにすめる秋の河音

秋浦夜

月をこそまつが浦島こゝろある蟹のけぶりも立てぬしわざは

秋社

いなり山あらしもよるの聲すみて月しづかなる秋のかみがき

秋山家

世のうさはおもはぬ秋も山ふかき霧のしづくに袖やぬらさむ

秋夢

さらに見むいそぢの秋のまくらかとぬる玉のをも長き夜の床

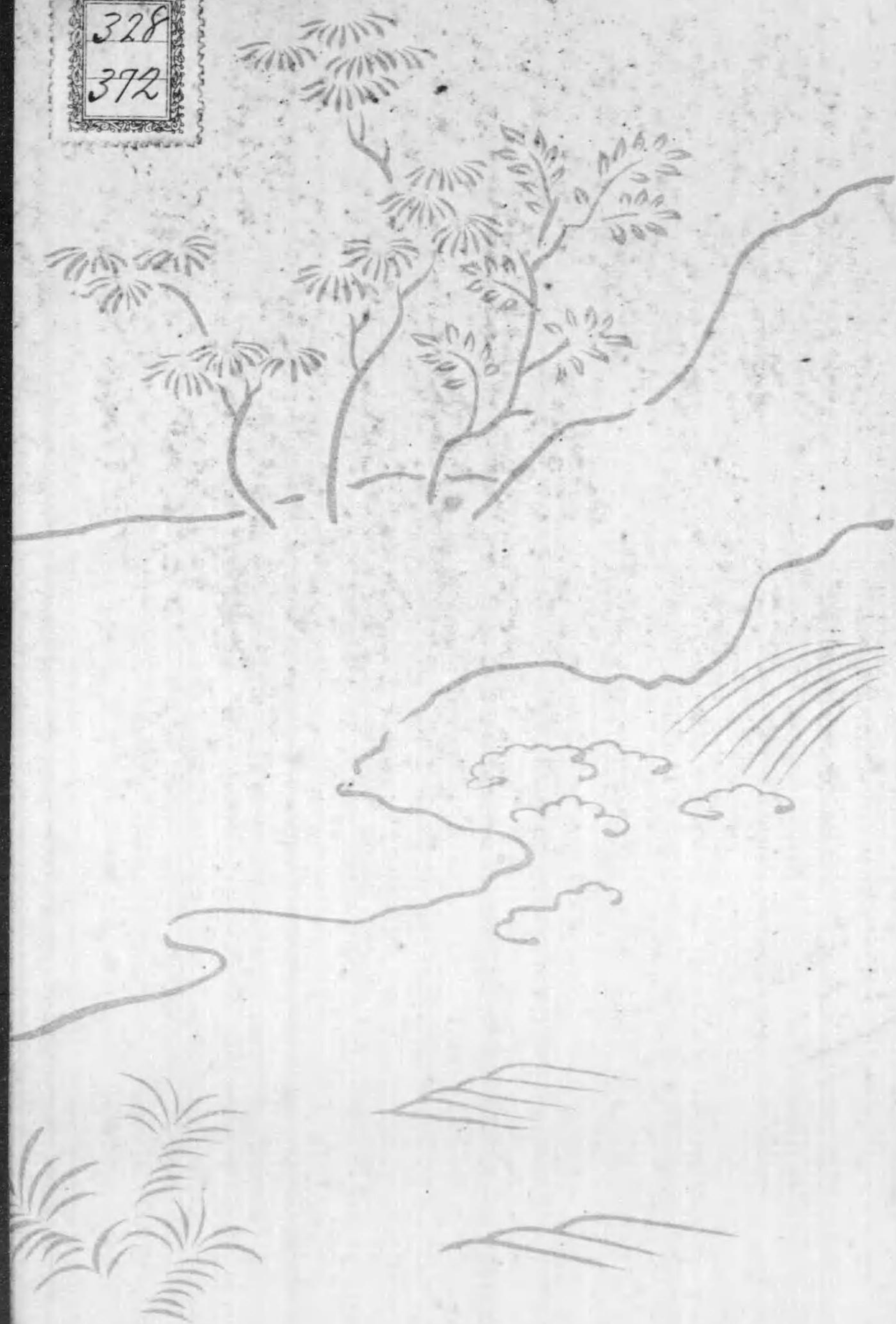
秋燈挑盡未能眠

いくたびかかゝぐる秋の夜ながさもさらに光の闇のともし火

「挑盡」二字桃
葉御集に據て
補ふ、

〔以上靈元院御集〕

328
372



終